てつすげえじゃんけ将棋頭・石積出！

御勅使川旧堤防（将棋頭・石積出）国指定10周年記念シンポジウム

― 記 録 集 ―

2014

南アルプス市教育委員会

周知用に作成したチラシ

7つすげえじゃん！！将棋頭・石積出！

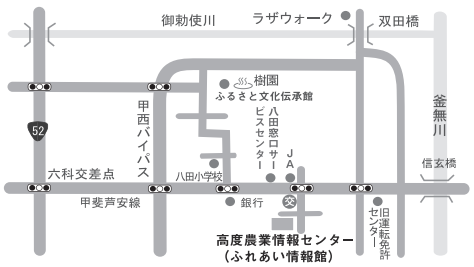
御勅使川旧堤防（将棋頭・石積出）国指定10周年記念シンポジウム

2013. 10/6 SUN

am10:00～12:00／pm12:30～5:00

［会場］高度農業情報センター（ふれあい情報館）

南アルプス市榎原800　Tel.055-285-1883



［入場無料です。お気軽に起こしください。］

主催／南アルプス市教育委員会［お問い合わせ］市教育委員会文化財課　Tel.055-282-7269

後援／青空生産農場、一般社団法人南アルプス青年会議所、上高砂まちづくりプロジェクト、NPOファームフィールドトリップ、NPOフードバンク山梨、国土交通省関東地方整備局富士川砂防事務所・南アルプス子どもの村小中学校、山梨県中北建設事務所、山梨県考古学協会、山友会

平成25年度地域の特性を活かした史跡等総合活用支援推進事業

10/5 土

特別企画

石積出に積もっている砂利をどけて、昔の姿をよみがえらせよう！

輝け！南アルプス 10 市制10周年 ビッグテンイヤー BIG TEN YEAR

御勅使川旧堤防（将棋頭・石積出）国指定10周年記念

御勅使川ゆかりの史跡を歩く

●時　　間：８時30分集合・出発／１５時解散予定
●集合場所：ふるさと文化伝承館（樹園）駐車場
●参加費用：200円（保険料込・当日お持ちください）
●定　　員：申し込み先着７０名
●申込方法：南アルプス市教育委員会文化財課までお電話で
　　電話番号：０５５－２８２－７２６９
●持 ち 物：昼食・水筒・タオルなど
●ルート：約４ｋｍのウォーキング
　ふるさと文化伝承館→（バス）→石積出(文化財調査体験)→水宮神社→矢崎家住宅
　→徳島堰→桝形堤防→将棋頭（昼食・クイズ）→（バス）→ふるさと文化伝承館・樹園
●体験イベント：石積出文化財調査体験・将棋頭米稲刈り体験・御勅使川縦断ウルトラクイズ
●雨天中止：来た方には伝承館で前御勅使川旧堤防の最新発掘情報を解説

石積出

水宮神社

矢崎家住宅

将棋頭田んぼアート

語り部の話・果物のサービス・クイズ王には素敵なプレゼントも！

桝形堤防の発掘現場も見れるんだ！すごい。

10/6 日

御勅使川旧堤防（将棋頭・石積出）国指定10周年記念シンポジウム

クイズ王には素敵なプレゼントも！

てっ、すげえじゃんけ将棋頭・石積出！

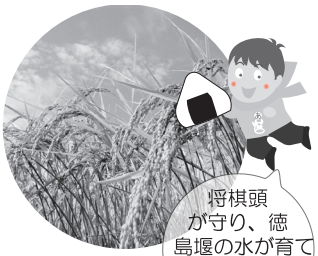
体験イベント　午前10時～12時

まぼろしの竹蛇籠づくり体験！
洪水を防ぐ砂防ダムのしくみを体験！
新ブランド？将棋頭米おにぎりを食べよう！
史跡を守るヤギと遊ぼう！

匠の技を体験できます！

会いに来てね

史跡内の雑草を食べて活躍するヤギに会おう！


将棋頭が守り、徳島堰の水が育てたお米。おいしいよ！

シンポジウム　午後12時30分会場～５時まで

御勅使川縦断ウルトラクイズ！
【基調講演１】日本における御勅使川旧堤防（将棋頭・石積出）の価値（仮題）
　　文化庁文化財部記念物課主任文化財調査官　佐藤正知
【基調講演２】文化財を活かしたまちづくり（仮題）
　　山梨県教育委員会教育庁学術文化財課　森原明廣

将棋頭・石積出ってなに？
　　南アルプス市教育委員会文化財課
みんなで語ろうまちづくり劇場

映像やお芝居・語り部さんの昔話など、笑いあり、感動ありなんだって。おもしろそうだわ

［会場］高度農業情報センター（ふれあい情報館）　無料です。申し込み不要。

当日の配布資料

御勅使川旧堤防（将棋頭・石積出）国指定10周年記念シンポジウム

史跡で語ろ！まちづくり

てっすげえじゃんけ、将棋頭・石積出！

平成25年10月６日（日）

■午前の部■　展示と体験イベント

10：00～

① まぼろしの竹蛇籠づくり体験！
② 洪水を防ぐ砂防ダムのしくみを体験！
③ 新たなブランド！？　将棋頭米のおにぎりを食べよう！
④ 史跡を守るヤギと遊ぼう！
⑤ 展示：上高砂まちづくりプジョジェクト！
⑥ 展示：南アルプス子どもの村小中学校　など など

■午後の部■　シンポジウム

12：50　オープニングアクト　（舞踊：ああ将棋頭武田笛）

13：00　開　式

ご挨拶

～どれだけ知ってる！？～　御勅使川縦断ウルトラクイズ

13：15　【基調講演１】　日本における御勅使川旧堤防（将棋頭・石積出）の価値（仮題）
文化庁記念物課　主任文化財調査官　佐藤正知

14：00　【基調講演２】　文化財を活かしたまちづくり（仮題）
山梨県教育庁　副主幹文化財主事　森原明廣

14：45～15：00　休　憩

15：00　【なるほど講座】　将棋頭・石積出ってなあに？
南アルプス市教育委員会　文化財課

15：40　～みんなでかたろう　まちづくり劇場～

17：00　閉　式

主催：南アルプス市教育委員会

後援：青空生産農場、一般社団法人南アルプス青年会議所、上高砂まちづくりプロジェクト、NPOファームフィールドトリップ、NPOフードバンク山梨、国土交通省関東地方整備局富士川砂防事務所、南アルプス市子どもの村小中学校、山梨県中北建設事務所、山梨県考古学協会、山友会

例言：

1．本書は、平成 25 年 10 月 6 日に開催したシンポジウム「てっ すげえじゃんけ将棋頭・石積出！」の開催記録である。

2．タイトルの「てっ すげえじゃんけ」は甲州弁である。「てっ」は感動詞の「まあ！」、語尾の「け」は体言、動詞、形容詞の連体形、形容動詞の語幹につき疑い・問いかけを表わす。つまり「てっ　すげえじゃんけ」は、「まあ すごいじゃないか」といった意味。

3．本書の編集は、南アルプス市教育委員会文化財課が行った。

4．シンポジウム並びに本書の作成については、平成 25 年度史跡等及び埋蔵文化財公開活用補助事業として実施した。

5．紙面の都合により、基調講演については要旨のみの掲載となったが、要旨については、当日の録音から、南アルプス市教育委員会の責任において作成したものである。

【前日イベント】

～　御勅使川ゆかりの史跡を歩く　～

毎年恒例のウォーキングイベントだが、今年はシンポジウムに併せて 10 月 5 日に実施した。しかし荒天のため、計画の 1 日コースを半日に圧縮し、さらにバスツアーとしての実施となった。

【午前の部】

～　体験イベントと展示　～

シンポジウム当日の午前中は、様々な団体や個人にご協力いただき、会場である高度農業情報センター（ふれあい情報館）のロビーやエントランススペースにおいて様々な体験イベントや史跡に関連する展示等を行った。

■フードバンク山梨

フードバンクやまなしの活動を皆さんに知っていただくために出展していただいたブース。今年、史跡である「将棋頭」で守られてきた水田で造られたお米は、フードバンク山梨の活動にも役立てられた。

■ヤギとふれあう

今年史跡の除草を担ってくれたヤギと触れ合えるコーナー。やぎの世話の大変さや、史跡を良好な状態に保つことの大変さなどもあわせて知ってもらった。

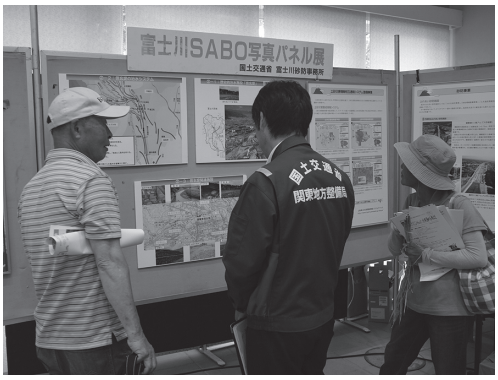
■新たなブランド!?　将棋頭米の試食

史跡である「将棋頭」によって水害から守られ、歴史的な用水路である「徳島堰」の水で育てられた『将棋頭米』の試食コーナー。史跡と水田景観を守ることの大切さも知っていただいた。

■上高砂まちづくりプロジェクト
■南アルプス子どもの村中学校

左は「上高砂まちづくりプロジェクト」のブース。地域の景観のすばらしさに気付き、行なっているフットパスや「甲斐ミント街道」の整備などの活動を紹介した。
右は、私立南アルプス子どもの村中学校の「くらしの歴史館」クラスの 10 名が、１年間を通して南アルプス市の自然・歴史・文化をテーマに研究した成果や、学習内容にまつわるクイズを ipad で作成して展示した。事前学習や現地見学などについては、文化財課が協力している。

■国土交通省 富士川砂防事務所



国土交通省富士川砂防事務所のブース。土石流やこれを防ぐ砂防ダムの仕組みなどがわかりやすく解説された。

■南アルプス市立図書館
■文化財MなびARデモ

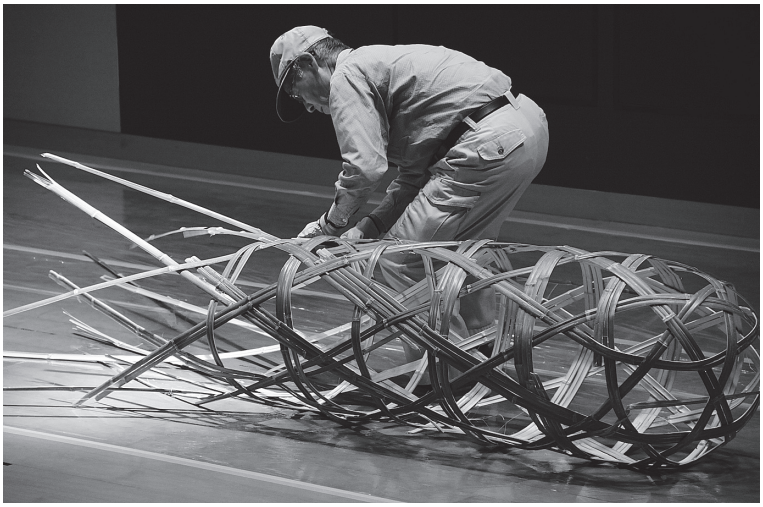
会場のホールに併設された図書館のブース。水や治水、今年史跡の除草を担ってくれたヤギなどに関する蔵書が展示された。右は、文化財課が開発した文化財ＭなびＡＲ（拡張現実）のデモ。

■まぼろしの竹蛇籠づくり体験

蛇籠づくりを体験する文化庁の佐藤主任調査官

蛇籠の中に石を投げ入れる中込市長

上高砂地区の三人の方が伝承している、昔ながらの「竹蛇籠」づくりをみんなで体験した。竹というどこにでもある素材で道具は槌と鎌だけ。中に詰める石は、籠を編んだ後、どんどん投げ入れれば、蛇籠の網目が勝手に広がり石が入って元に戻る。蛇籠の網目より大きな石が次々に吸い込まれていく。重機などを用いることもない水防現場での即応性に参加者は感心していた。



■ 展示の様子

当日は、史跡「御勅使川旧堤防（将棋頭・石積出）」をはじめとした堤防遺跡や、南アルプス市の水の歴史についての展示を行った。併せて、遺跡からの出土品や様々な文化財を展示し体感できる「南アルプス市ふるさと文化伝承館」の活動なども紹介した。

～　開会（オープニングアクト）　～

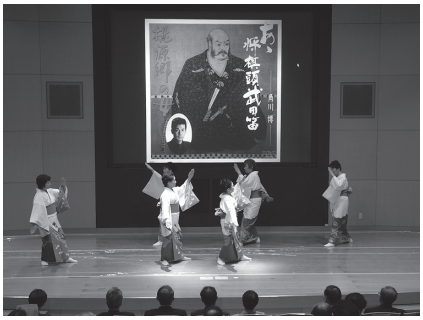
総合司会　文化財課田中：皆さんこんにちは。それでは定刻になりましたのでシンポジウムを始めさせていただきます。今日司会を務めさせていただきます、南アルプス市教育委員会文化財課の田中と申します。よろしくお願いいたします。

皆さまご存知だと思いますが、この南アルプス市にある将棋頭・石積出。御勅使川旧堤防が国の指定となって 10 周年を迎えました。これは南アルプス市の大切な資産なんですけども、まだまだ知られていない。そこでこの 10 周年を期にですね、次の 10 周年さらにはその先の 100 年、さらに先を目指して、その方向性を皆様と共有するために、このシンポジウムを企画いたしました。将棋頭・石積出は、水に苦しんできた南アルプス市を象徴する資産なんですね。南アルプス市にしか出来ない個性的なまちづくりをする格好の素材になるはずです。今日はそういう認識を皆さんと共有し、皆さんと一緒に史跡を利用して本物のまちづくりを進めていくヒントを得たい、そういうことを考えましてこのシンポジウムを開催させていただきます。

今回のシンポジウムはですね、きちんとした先生にお話を聞いて勉強したい、っていう側面ももちろんあるんですが、それだけじゃなくて、**笑いあり、涙あり**というようなことでちょっと型破りなシンポジウムを、うまくいくかどうかわかりませんけども企画してみました。ぜひ皆さん最後まで楽しんでいっていただけたらと思います。

オープニングアクトとして演じてくださる民謡部の方々がいらっしゃいます。なんでこの方々に今日お願いしたかといいますと、市の文化財の仕事をしていて私も知らなかったんですが、実は**「あゝ将棋頭武田笛」**という歌があったんですね、ご存知の方いましたか？私は知りませんでした。これです。なんと角川博が歌ってる！実は白根町のほうでこの歌を作って、ずっと絶えていたのを、奇しくも今年復活してくださった方々がいます。源（みなもと）民謡愛好会のみなさんです。今年復活してお祭りで踊った、その話を聞いて、そうであればぜひともオープニングアクトはこれだということでお呼びいたしました。どうぞお入りください。どうぞステージのほうへ上がって下さい。なんと踊りもついている。歌だけでなく踊りもついているんです。今後ぜひとも広めてきたいですね。それでは踊っていただきましょう。「あゝ将棋頭武田笛」です。よろしくお願いいたします。

♪　歌と踊り　あゝ将棋頭武田笛　♪



田中：皆さんありがとうございました。さて、華やかに始まったところで、続きまして開式の言葉を主催者を代表いたしまして教育長横小路より申し上げます。

横小路教育長：皆さんこんにちは。本日は文化庁の佐藤主任文化財調査官をはじめとして来賓の皆様や関係各位、それから大勢の会場の皆様に出席を頂きまして本当にありがとうございます。ここにもありますように本日は「てっすげえじゃん」すごい言葉ですね、「将棋頭・石積出」というテーマで、国指定 10 周年記念シンポジウムを行なうことになりました。これは皆さんに楽しんでいただき、そして知っていただき、そして協力していただく、ということがテーマでございます。ぜひ有意義な時間になりますようご協力をお願いいたします。それではシンポジウムを始めたいと思います。よろしくお願いいたします。

南アルプス教育委員会
教育長　横小路　允子

南アルプス市長　中込博文

田中:ありがとうございました。続きまして南アルプス市長よりご挨拶申し上げます。中込市長お願いいたします。

中込市長：皆さんこんにちは。今日はこの将棋頭などが国の史跡に指定をされて 10 周年ということでシンポジウムを開催いたしますが、多くの方に来ていただきまして本当にありがとうございました。また国の佐藤主任調査官、おいでいただきまして本当に感謝しております。県からも森原さんがおいでいただいております。

私はですね、南アルプス市を自然と人とが調和できる、そんなすばらしいまちにしていきたいと思っております。これからは国も大事ですけども地方が大事でありまして、南アルプス市がすばらしいまちになって、そして全国の市町村がいいまちになれば国も良くなるだろうと、このように思っております。その為には私は歴史を学ぶことが大事だというふうに思っております。私は市長になって、いっぱい課があるんですけれどもみんなそれぞれの課が頑張ってくれている。今年は国民文化祭もありまして教育委員会本当に大変ですけども、みんな燃えて頑張っていただいている。生涯学習課が担当しております。そして、南アルプス市の歴史を担当しているのがこの文化財課でありまして、私の誇る、本当に私の自信を持って誇れる職員でありまして、すばらしい研究をしてくれておりまして、このシンポジウムもその一つだと思っております。私はこの文化財課の面々はどこの市町村に比較しても、うちが日本一だと思うくらい本当に心から市長として彼らの活躍を感謝しております。ですが、どんな立派な活躍をしても市民が一体となって彼らの活躍を学んでそして、このまちをつくっていかなくてはならない。何のために歴史を学ぶかということはですね、私は未来に、歴史を学ぶなかで我々はどういうまちをつくっていくかということ、そこにつなげて初めて彼らの活動が生きてくるんだろうと思っております。

私はいままでの仕事(※)の中で防災では自分はプロであると思っておりますが、防災で一番大事なことはですね、命さえ失わなくて守ってさえいれば人間の英知でもってなんぼでも良い社会が創れるんですね。だから、皆さんご存知のとおり、津波で飲み込まれさえしなければ、あの時歴史を学んでいて子供たちをなんとか、なにしろ車も立派な家もいいから山へ逃げろといったほうが大事だったんですね。ここで御勅使川扇状地が出来ているのはですね、私は必ず千年や一万年に一度大洪水がきたから扇状地があってその扇状地の恵みの流れでおいしい果物が出来る。だからマイナスのこともありますけどもプラスにもなるわけですね。知恵があればマイナスのものをプラスに出来るわけですから、その前に人が亡くなってしまったら駄目なので、私たちはこの史跡を学ぶことによってですね、これから大洪水がきたら皆で命だけは守る、逃げてやろうということも学べる。そういう意味でですね、私はこの彼らの活動を無にしないように市長以下市民の皆さんと一緒に学んで、そして将来我々の子々孫々にまでつなげて行きたいなとこのように思っております。私はできれば、大きな歴史ミュージアムを造るよりもフィールドミュージアムを造りたいと思っております。それはこの今回見ていただくこの将棋頭を整備をして、そこには常に市民がいてお弁当食べたりしながら我々の先人を偲ぶ、次は鋳物師屋遺跡(※※)に行ってですね、お腹の大きな土偶を見ながら、やっぱり昔から子育てを大事にした、そういうのがあってこれからも我々は子育て支援をじっくりやって素晴らしい市民をつくっていかなきゃいけない。そういうことをフィールドミュージアムの中から学ぶ市民になって、そして将来をつなげていくと、そんなまちを創ってみたいと思っております。その中核になって活躍してくれているのが今の文化財課のメンバーだろうと思っております。今日は、そんな一つの流れのなかのシンポジウムですけれども、意義あるシンポジウムになってもらえばと主催者として思っております。今日はご参加いただきまして感謝を申し上げましてご挨拶といたします。本当にありがとうございます。

田中：市長ありがとうございました。それではですね、次のコーナー、突然ですがクイズをやります！さあどうなるか！オープニング行きましょう！！

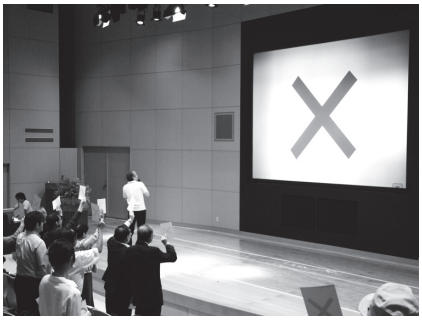
※いままでの仕事　防衛大学校卒業後、陸上自衛隊へ入隊。　**※※鋳物師屋遺跡**　南アルプス市下市之瀬にある平安時代前半及び縄文時代中期を中心とする遺跡。出土した縄文時代中期の土器等遺物が一括して重要文化財に指定されている。中でも円錐形土偶や人体文様付有孔鍔付土器が著名で、大英博物館等海外の博物館でも展示されている。通常は南アルプス市ふるさと文化伝承館に常設展示される。

～ どれだけ知ってる！？　御勅使川縦断ウルトラクイズ ～

♪ウルトラクイズのテーマ曲♪

田中：ある年代以上の方、この音楽懐かしいんじゃありませんか。どっかで聞きましたよね？何とか横断何とかクイズってのがありました。今日は史跡を語る会ですので、『御勅使川縦断ウルトラクイズ！』ということで開催して行きたいと思います。

皆さん、指定10周年を迎えたこの史跡、ある程度ご存知だとは思いますが、実は本当のところどれだけ知っているのか。いいえ、知らなくても結構なんです。今日勉強して帰っていただいて最終的に知っていただければいい。どれだけ知っているのか自信のある方は頑張ってもらいたい。自信のないかたでも、ああ、なかなか知らないものだなあっていう思いだけ、ここでは持ってもらえればと思います。音楽が終わりましたらスタートいたします。



皆さんそうしたら立っていただいて、お手元に○と×の札があると思いますので、私の合図にあわせて○とか×を出していただきたいと思います。じゃ、皆さん御起立下さい。私が問題を申し上げます。あまり考えちゃだめですよ、○だと思えば○をあげて下さい。×だと思ったら×をあげて下さい。それでですね、正解の方だけそのまま立っていただいて、残念ながら答えられなかった方は座っていただくというようなかたちにしたいと思います。最後まで残った方にはすてきな豪華商品がありますので皆さん頑張って考えてみて下さい。問題をお出ししてから5秒間くらいドラムロールが流れます。それが終わるまでに回答して下さい。それでは早速いきましょう。

予想以上に盛り上がった~~アメリカ横断~~
御勅使川縦断ウルトラクイズ

第1問　将棋頭・石積出は御勅使川に作られた昔の堤防である。

○か×か。はい、○の方多いですけど×だったらこれ一発で終了すね（笑）。はい、正解は・・・○でした。じゃ×の方座っていただいて。ああ、良かったです。こちらの執行部の皆さん残っていただいて。それでは・・・

第2問　石積出とか将棋頭は<u>あの</u>武田信玄が作ったから価値がある。

○か×か。割れましたねえ。どうですか、自信もって高くあげて下さいね。はい、では正解は・・・×です。武田信玄が造ったから価値があるのではなくて、もし武田信玄が造ってなくてもこの史跡にはとても価値があるんです。これから先のシンポジウム等でご理解いただけると思います。さあ、早速時間も無いので三問目にいきます。

第3問　現在のされている石積出とか将棋頭の姿は、作られた当時のまま遺されているから価値がある。

○か×か、どうでしょう。正解は、ドン。×です。ああっ！　市長以下教育長、教育委員長もここで脱落しました！答えは×です。実はですね、信玄が造ったのかどうかも証明されていませんし、造られた当時の姿がそのまま残っているわけではないです。でも価値があるんだぞ！という事を今日の終りにはわかっていただけると思います。みなさん予定通りの答えをいただきました、ありがとうございます。次、四問目になります。これちょっと概念の話になります。じゃあ四問目いきます。

第４問　これらの史跡は昔のことを知るためだけに指定されている。

国の文化財指定です。○か×か。どうぞ。答えはどっちだ。あっ×ですねえ。そうなんです、ただ昔のことを知るためだけに史跡が指定されているわけではない。もっともっと利用価値があります。次、知っている人は簡単かもしれません。

第５問　石積出は一番提から五番提までが残っていますが、指定されているのは一番堤から三番提までである。

○か×か。正解は○です。そちらの専門家の方々はさすがに強いですね。次、映像問題いっちゃいましょうか。次は映像問題です。問題いきます。

映像問題：答えは下条南割の将棋頭（韮崎市）

第６問　いま映し出されている写真の堤防は桝形堤防（ますがたていぼう）と呼ばれる堤防である。

○か×か。正解は・・・×ですね。お立ちの方だいぶ少なくなってきました。問題も、だんだんマニアックになってきました。それでは、この問題で最後にしましょう。残った方がたには豪華商品を差し上げます。問題です。

第７問　江戸時代､石積出は御勅使川扇状地に位置する 21 の村々を守っていた。

これ難問です。はい、分かれました。正解は×です。これ、知ってる人ほど間違えるんですね。有野（ありの）村に遺されている史料に有野村以下 21 ヶ村を守ったって書いてあります。当然有野村も守ってますから 22 の村を守ったが正解になります。

田中：では勝った方には目録を差し上げます。スタッフの皆さんちょっと手伝ってください。目録は「稲穂」です。でもこの稲穂はただの稲穂ではありません。後でご説明いたしますが歴史的な堤防である将棋頭で守られた水田で作られたイセヒカリ(※)という特別なお米の稲穂です。これはでもあくまで「目録」でございます。この目録を持っている方は帰りに受付に「私勝ちました」って言ってください。そうすると後で本物のイセヒカリのお米をお渡しすることになっております。そしてこの稲穂、赤い紐で結んでありますが、これは小笠原流(※※)礼法の「叶（かのう）結び」という結び方で結んであります。南アルプス市発祥の小笠原流です。「叶結び」、皆さんの夢が叶いますようにという結び方です。皆さんの夢がかないますように！

さて、こんな風にですね、史跡に関するクイズをやってきました。意外と知っているようで知らなかったという方が多かったかと思います。今日はですね、この史跡のシンポジウムを最後まで聞い今回の答えが本当にわかるように構成させていただいています。最後までお付き合いください。

勝利者目録のイセヒカリの稲穂と後日勝利者に届けられたお米

では、この先は講演ということで始めさせて頂きたいと思います。まず最初にご講演賜りますのは、文化庁の主任文化財調査官であります佐藤正知先生です。先生ご登壇くださいませ。先生は文化庁のほうで全国の史跡を統括していろんなところの保存計画であるとか保護､それから活用に携わって下さっている方でございます｡全国の史跡を知っている方です。そういう方からみて、全国的な視野で私どもの資産である史跡、御勅使川旧堤防には、どのような個性があって、どのような価値があるかとかそんなことを今日は教えていただけたらと思います。それでは先生、よろしくお願いいたします。

※イセヒカリ　コシヒカリの突然変異種といわれ、平成元年に伊勢神宮の神田で発見された。　**※※小笠原**　甲斐源氏小笠原長清は、現在の南アルプス市小笠原の地を拠点とし、この地を「名字の地」としたと云われる。この地はその後全国的に飛躍した小笠原氏の発祥の地とされる。

【基調講演１】

南アルプス市の宝もの・日本の宝もの【要旨】

文化庁記念物課　主任調査官　佐藤正知

南アルプス市の宝ものである史跡「御勅使川旧堤防（将棋頭・石積出）」は、南アルプス市の宝ものでありながら、同時に日本の宝ものである。南アルプス市にあるが、南アルプス市だけのものではない、これは日本の宝であるというのが、本日の演題である。なぜならば、「御勅使川旧堤防（将棋頭・石積出）」は 10 年前に史跡に指定されており、それはつまり、我が国の歴史を理解する上で欠くことの出来ないものであることを意味するからである。

佐藤正知さん

―　史跡とはなにか　―

史跡とは「我が国の歴史を理解する上で欠かすことのできないもの」であるが、大きく９種類に分けられる。

１．貝塚等のように通常我々が遺跡と呼んでいるもの。
２．都城跡、平城宮であるとか、あるいは何々国府など、政治に関わるもの。
３．信仰に関わるもの。山梨では甲斐の国分寺とか国分尼寺などがこれに相当する。
４．学術、文化に関する遺跡。
５．生活に関わる遺跡。
６．経済、生産活動に関わる遺跡。
７．墳墓及び碑。
８．旧宅、園地等。
９．外国及び外国人に関する遺跡。

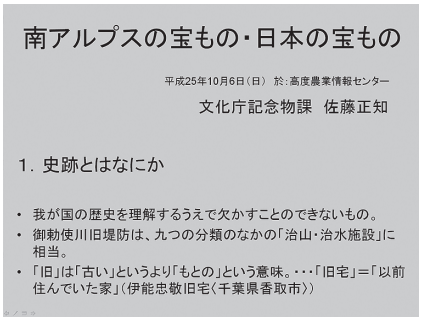
この中で、６の経済・生産活動に関する遺跡の中に、治山・治水施設があり、「御勅使川旧堤防」はここに含まれる。時代別では、原始、古代、中世、近世、近代に分けられる。現状では、「御勅使川旧堤防」は武田信玄に関わるものだということで、中世に位置付けられているだろう。また、経済、生産活動に関する遺跡については、中世及び近世で 100 件程度あるが、しかし２件の特別史跡、「新居関跡（静岡県）」・「日光杉並木街道（栃木県）」を含め、そのほとんどは、交通に関する遺跡である。治山・治水施設は多くない。これが御勅使川旧堤防が全国的にも大事なものだということのひとつの理由である。

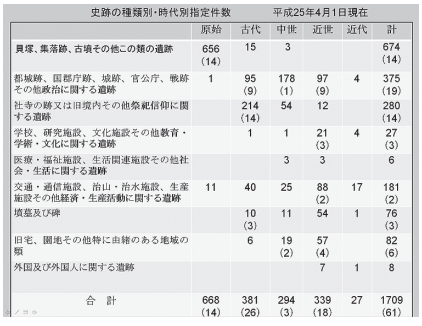
なお、８に旧宅とあるが、旧宅の旧という字は、本来は「古い」という意味ではなく、「もとの」という意味である。したがって、「御勅使川旧堤防」の旧も、もとの堤防であることを意味している。

―　治山・治水施設・・・堤防・ダムなど　―

史跡は、全部で 1709 件指定されているが、その中で治山治水というものは非常に数が少なく、現在ここに挙げた５件のみが指定されている。

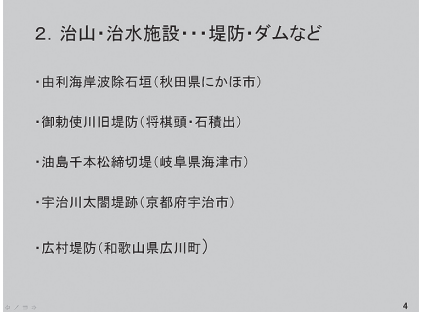
１．由利海岸波除石垣
２．御勅使川旧堤防

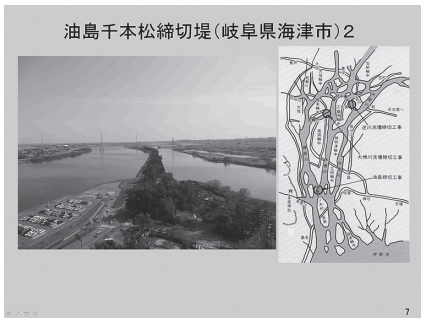


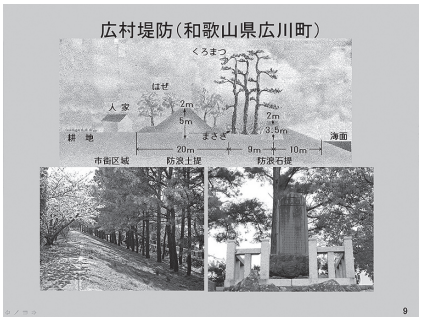


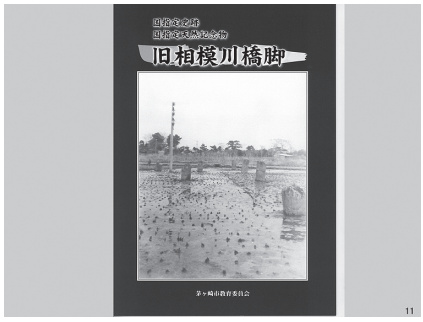
史跡の種類別・時代別指定件数　　平成25年4月1日現在

	原始	古代	中世	近世	近代	計
貝塚、集落跡、古墳その他この類の遺跡	656 (14)	15	3			674 (14)
都城跡、国郡庁跡、城跡、官公庁、戦跡その他政治に関する遺跡	1	95 (9)	178 (1)	97 (9)	4	375 (19)
社寺の跡又は旧境内その他祭祀信仰に関する遺跡		214 (14)	54	12		280 (14)
学校、研究施設、文化施設その他教育・学術・文化に関する遺跡		1	1	21 (3)	4	27 (3)
医療・福祉施設、生活関連施設その他社会・生活に関する遺跡			3	3		6
交通・通信施設、治山・治水施設、生産施設その他経済・生産活動に関する遺跡	11	40	25	88 (2)	17	181 (2)
墳墓及び碑		10 (3)	11	54	1	76 (3)
旧宅、園地その他特に由緒のある地域の類		6	19 (2)	57 (4)		82 (6)
外国及び外国人に関する遺跡				7	1	8
合　計	668 (14)	381 (26)	294 (3)	339 (18)	27	1709 (61)









3．油島千本松締切堤

4．宇治川太閤堤跡

5．広村堤防

この中で、「御勅使川旧堤防」は、防潮堤である「広村堤防」などとともに、これからの減災社会を考える上で重要な役割を果たすのではないか。いずれにしても今あげた堤防、堤防の類は、この５つが指定されているものの全てであり、今後もっと指定していかなければいけないと考えている。

このほか、災害に関わる史跡について、代表的なものをひとつ取り上げるとすると「旧相模川橋脚」がある。これは神奈川県の相模川に鎌倉時代に出来た橋の跡とされる。関東大震災の時に液状化によって地中から現れ、早くも大正時代に史跡に指定されたものである。

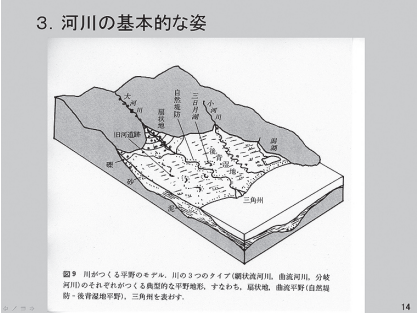
この史跡の注目すべき点のひとつは、これが今日に至るまで保存されてきた事実である。地域の人びとによって、空気に触れないよう長い間水中で守られてきた。現在は保存処理が行われ、周辺も整備されているが、大正時代から関東大震災で出現した橋脚を今も守っているという例である。

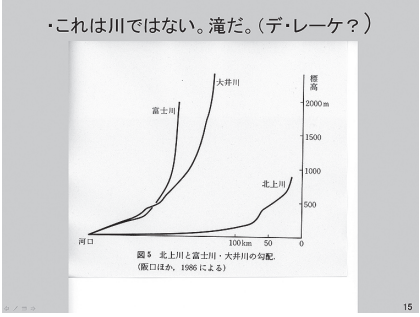
― 河川の基本的な姿 ―

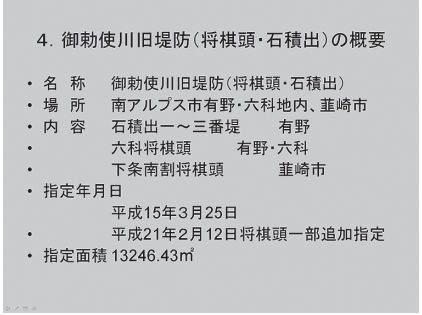
河川というのは山から流下し、扇状地、曲流平野（自然堤防、後背湿地平野）、三角州をつくるが、南アルプス市は扇状地帯におさまる地形的特徴がある。　急しゅんな地形を流下する日本の河川を見たオランダ人のお雇い外国人デ・レーケは、「日本の川は川ではなく、滝だ」と言ったともいわれるが、その中でも御勅使川を含む富士川水系の河川勾配は特筆される。その水の制御をするのがこの「御勅使川旧堤防」である。

― 御勅使川旧堤防（将棋頭・石積出）の概要 ―

現在石積出の一番堤から三番堤が指定されている。これに加え、六科（むじな）と下条南割（しもじょうみなみわり）（韮崎市）の将棋頭も合わせて指定されている。平成 15 年に指定され、今年 10 年目を迎えた。この間、六科の将棋頭の堤防の続く土地を売却して工場を建てるという計画があり、確認調査を実施したところ、その延長部分が確認され、追加指定を行った経緯がある。このほか、近年の調査によって、近世に開削された歴史的疎水である「徳島堰（とくしませぎ）」の水を将棋頭に守られた水田に導く分水施設を守る「桝形堤防」の重要性が明らかにされている。







― 御勅使川旧堤防の価値 ―

1．武田信玄との関わりがあること。

これまでの発掘調査の成果からは、現在武田信玄との関係はあまり強調できないということになっている。江戸時代後期の『甲斐国志』によれば、武田信玄がこの堤防を造ったということになっているが、あまりにもその時代が下るので、発掘調査によって確証をつかむ必要がある。しかし、現状では武田信玄まで遡る確実な材料がない。

ただし、武田信玄との関わりというのは捨ててはいけないと考えている。「関わりがあるとされてきた」という事実は重く考えていかなければいけないのではないか。熊本においては加藤清正、高知においては野中兼山が治水家、治水土木事業主として活躍するが、それと同じように武田信玄の存在というのは大きかったはずである。当時の城造りや鉱山開発などの技術をやはり治水技術に応用している。そういう時代背景があるのではないか。これらを充分踏まえたうえで考えていく必要がある。

2．石積出は日本有数の規模を誇る御勅使川扇状地全体を守る治水施設であったこと。

御勅使川の扇状地は、全国でも指折りの扇状地といえる。そこに築かれているということは重要である。

3．将棋頭は徳島堰によって灌漑された水田やその下流域を守る役割を果たした治水・利水施設であったこと。

徳島堰によって灌漑された水田を守るのが将棋頭であった。桝形堤防は用水を守って、そこから将棋頭の堤内の水田に引水されており、したがって将棋頭は治水・利水が一体となった施設といえる。水害から水田を守るということだけではなく、それをいかに利用するかが、この施設の本質であったといえる。

4．桝形堤防は徳島堰の用水を将棋頭の堤内地に営まれた水田に分水する水門を守る堤防で、将棋頭と一体となって機能した治水・利水施設であったこと。

5．石積出や将棋頭の根固めに近代的河川工法の特徴がみられ、明治以降の治水・利水の技術革新を示していること。

近世だけで終わらない近代的な河川工法もここには見ることができる。したがって、その伝統的な工法と近代的な工法がどのように係わってきたのかがここに示されている。

6．地域の治水・利水の歴史を語るかけがえのない遺構であること。

地域の治水・利水の歴史を語る上で欠かせない。これは、やはり南アルプス市にとっては非常に重要なことである。

7．石積出は不連続堤、水害防備林が一体となって機能した伝統的河川工法を学ぶ場として重要である。

現在も不連続堤や水害防備林などのこされ、伝統的な河川工法の姿を今に留めている。近代的な技術が災害を防止してきたことは事実だが、一方で今後の防災を考える上では、伝統的な工法の見直しも必要である。

今日、蛇籠（じゃかご）づくりを体験して驚いた。これまでは蛇籠は、竹を広げて石を詰めるのだと思っていたが、石をストンと落とすとどこからでも石が入っていく。これは極めてしなやかな竹という素材、どこにでもある竹という素材を利用して即座に対応できる知恵である。水が来たときに即応できる。鉄線ではそれは不可能である。このような知恵は継承していく必要があるのではないか。

8．将棋頭の堤内地に展開する水田は扇状地における農地景観をよくとどめている。

南アルプス市の特徴は、河川景観が非常にすばらしいということである。近代的な堤防は河川と集落とを隔てて

まったく異質な空間を作ってしまうが、南アルプス市のこの史跡は伝統的な工法に拠っているから、これが良くマッチしているということができる。

9．水害と水不足がつきまとう扇状地の暮らしを安定させる上で大きな役割を果たした治水・利水施設の存在は、南アルプス市の歴史を知るうえで欠かすことができないものであるが、伝統的な河川工法の実態や、それと近代的河川工法との関係など我が国の治水・利水を考える上できわめて重要である。

水害と水不足は、扇状地であるので表裏一体だった。水はたくさん来るが、しかしそれは全部その土砂の中に浸透してしまう。また、デ・レーケに代表される近代的な河川工法との関係は、この南アルプス市の御勅使川旧堤防を研究していけばいくほど、我が国の河川技術の変遷というものにたどり着く。本質的なそのテーマに行き着いていくといえる。

10. すでに開始されているが、次代を担う子どもたちに地域の自然と歴史を伝えていきたい。私は南アルプスのハイジたちのすこやかな成長を願っている。

南アルプス市では、この 10 年間、次代を担う子供たちに地域の自然と歴史を伝えてきたいという想いで一生懸命やってこられた。私は、彼らに育まれたそのハイジ（南アルプス市の子供たち）たちの石積出を駆け上るすやかな成長を願っている。

田中：大変貴重なお話をありがとうございました。佐藤正知主任調査官でございました。ありがとうございます。今回のお話を聞いて私たちの御勅使川の旧堤防がどんなことを語ってくれるのか、これからどんなことを語らせていけばいいのかということが少し見えてきたような感じがいたします。続きまして、次のご講演をですね、森原明廣先生に願いいたします。先生ご登壇ください。先生は、山梨県教育委員会学術文化財課に勤務なさっておりまして、史跡や埋蔵文化財の保護、活用ですとか整備のお仕事に携わっております。あの富士山の文化遺産の指定にも深く、深く携わってこられた方でございます。我々の良き先輩、兄貴分としていつもご指導賜っているところです。森原さんは私共の活動をよく見ていただいて、たまに批評をいただくんですが、今回はそのような中でですね、ふるさと南アルプス市って我々言ってますけど、じゃあ外からの目線でみて南アルプス市ってどんなところなんですか？　それから我々の活動の評価であるとか、それから問題点、まだ至らないところはどこなのか、また、いろんなところでご講演なさっておると思いますが、さらに魅力あるまちづくり、そのために史跡はどんなところが活用することができるのか？　そんな視点でご指南をいただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

【基調講演２】

文化財を活かしたまちづくり【要旨】

ふるさと南アルプスを好きになることからはじめよう！

山梨県教育庁　副主幹文化財主事　森原明廣

森原明廣さん

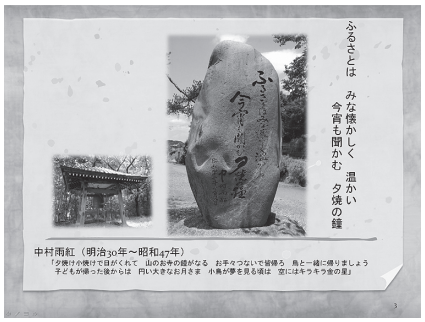
その土地ならではの資産、文化財を活かしたまちづくり、あるいは行政を進めていかないとこれから強い地方になっていかない。

―　ひとつの“風土”としてのまとまり「西郡」から「南アルプス」へ　―

南アルプス市は、今から 10 年前に、それまでの６町村が合併して成立したが、江戸時代、あるいは一部中世にさかのぼってみれば、「西郡筋（にしごおりすじ）」と呼ばれる一体の地域だった。これが平成の合併で南アルプス市として改めてまとまったかたちとなり、地形的にも文化的にも非常に理にかなった合併であったといえる。文化財や地域の歴史についても、細かい町村であったときには、中々見えにくかった地域としてのまとまりが見えるようになり、南アルプス市ではその調査研究が飛躍的に進展している。

―　だれもが、持つ心の拠りどころ　「ふるさとは遠くにありて想うもの」？　―
いや「近くにあってより深く想うもの」でしょう？

遠く離れて想うものというふるさとの側面もあるが、やっぱり本当はふるさとは近くにあって、より年をとればとるほど深く思っていくべきものとはいえないだろうか。その場合、南アルプス市の市民にとっての、ふるさとの風景とはなにか。さまざまなものが思いつく。市民それぞれの中にふるさとの風景というのがあるはず。それはいろんな側面で、たとえば文化財とか文化遺産、あるいはお祭、そういったものにのこされている。

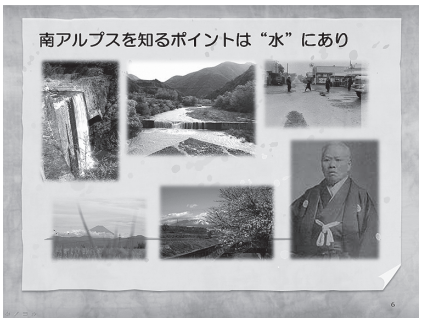


―　南アルプスを知るポイントは“水”にあり　―

その中で、南アルプス市を、深く知っていくポイントになるのが「水」である。

とくに、大正時代に造られた日本ではじめてのコンクリートを使った堰堤（芦安堰堤）が存在することに象徴され

るように、水害が多発した地域であるという歴史。水がありすぎて困るという側面。一方で、近世に徳島堰の開削が行なわれたことに象徴されるように、扇状地という砂礫質の土地であるがゆえに、水がなさすぎて困ったという双反する側面をあわせ持つことが特徴といえる。ただ、このような厳しい風土はしかし、水がなくても商品作物である煙草や綿花を商うことによって生き抜く強さを育み、天秤棒一本から身を興した甲州財閥、若尾逸平などを生む背景ともなった。



― “ほんもの”だけがもつパワー　南アルプスの様々な文化遺産 ―

そのような南アルプス市は、たくさんの文化財がの遺されてる。それらは全て“ほんもの”だけがもつパワーを放つ。実物、“ほんもの”には、その遺されてきた様々な歴史があり、ここに重さ、厚みがある。鋳物師屋遺跡の土偶、人体装飾付の土器（これらは“ほんもの”だからこそ、大英博物館などに出展されている）。大日如来及び四波羅蜜菩薩坐像、長谷寺本堂、夢窓国師坐像、安藤家住宅・・・。このほか南アルプス市の中に、国指定、県指定、市指定文化財など指定文化財だけで 160 以上がある。まだ指定されていないものもあり、文字通り世界に出しても恥ずかしくない、誇れる文化財が多々ある。こういったものが遺されていて、これから活かしていくべきものがたくさんあるといえる。

― 国史跡「御勅使川旧堤防（将棋頭・石積出）」 いのちを守ってきた文化遺産 ―

そのなかでも「御勅使川旧堤防（将棋頭・石積出）」は、とくに「いのちをまもってきた文化遺産」として重要である。豪族や領主などではなく、一般の庶民の生活、あるいは生業、くらし、これを守るために造られた土木構築物であり、それが国の史跡になっているという非常に珍しい例といえる。命にかかわる文化財、文化遺産であるというところがこの史跡の最大の特徴である。

― 文化財と巡り会うための“お手伝い”　あたかもそれは“文化財と市民の婚活” ―

このように守られてきた史跡を、南アルプス市の文化財課はただ守るだけではなくて、紹介、あるいは知ってもらおうという取り組みをこの 10 年ずっと行なってきた。文化財課の 10 年を見てきて、その活動の特徴は、以下にまとめることができる。

1．「文化財課のお手伝い」という言葉に象徴されるように、みなさんに地域を知っていただく、市民の皆さんが地域の歴史や文化を知っていただくお手伝いをするという姿勢、押し付けがましくないスタンスを貫いている。

2．「五感に訴える」を常に意識している。

文化財課では、これまで五感をフルに活かした活動、「場」を提供し続けてきた。 実物を見てもらいながら説明し、実際に手にとってもらう。これによって重さとか硬さとか質感が伝わる。土器で煮てつくったスープや、縄文時代のクッキーを食べてみるなどして、舌に訴え、嗅覚に訴える。また、実際に現地に行ってみる、体感してみるなどがそれである。

3．学校の現場に積極的にでかけている。

その際には、講義するだけではなく、次の週には現地にいってみるというセットになっていることが特徴。これによって学校と教育委員会あるいは役所の仕事が連携し、またその話を聞いた子どもたちが家庭に戻って話すことによって家庭の中でも繋がりができてくる。あるいは家庭教育の起爆剤にもなっているのではないだろうか。

4．昔ながらの展示、講座といったオーソドックスなやり方に加え、時として非常に先駆的な取り組みも行なっている。

「文化財Ｍなび」や「文化財ＭなびＡＲ（拡張現実）」といった、ＱＲコードやスマートフォンを使った情報発信などに代表される。(※)

5．地元の子どもたちがその文化財のことを調べ学習をして、それを看板にして現地にかかげるという試み。

子供たちの発表する場ともなり、調べたことが子供たちによって共有される。地元の子供たちが一生懸命手書きで作ったものが、その場にあるということがいかに大事なことか。お金をかけるということではなくて手をかける、時間をかける。そして守っていく。ここには子どもたちの想いが入っている。このような取り組みは地域にとって財産になっていくはず。

6．情報発信の方法に工夫が見られる。

史跡めぐりツアーのポスターやチラシ、刊行物が工夫され、とくに文化財が好きでもない一般の方を巻き込もうという姿勢が現れている。行ってみようかなという気持ちになる。文字がたくさんならんでいて、専門用語ばっかりでは、まずその段階で逃げられてしまう。そういうことがないように、南アルプス市の文化財のチラシは、文化財のチラシにもかかわらずかっこよくて、わかりやすいキャッチフレーズがついている。

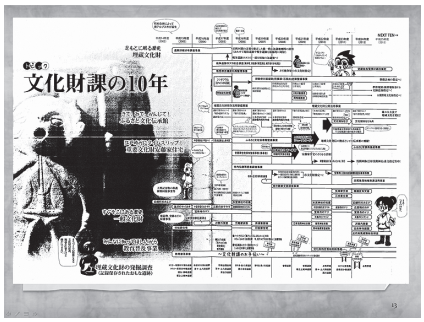
これら全ては、キャッチフレーズである**「ふるさとを好きになってほしいから」**という言葉に集約できる。そのため、このようにな非常にきめ細やかな対応がとられている。昔ながらの取り組みから最新鋭の取り組みまで、地域を知っていただく、あるいは好きになっていただくためには手段は選ばない。それが特徴といえる。

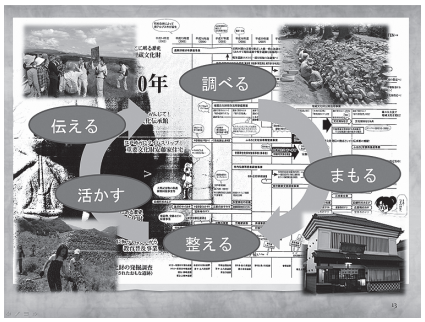
― 文化財課の 10 年 ―

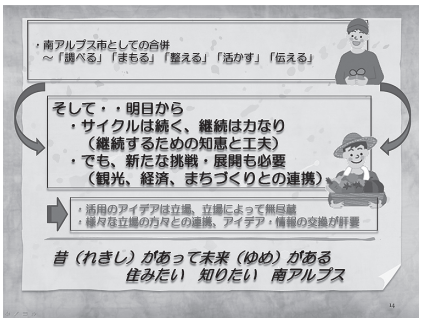
平成 24 年度版の文化財課の『年報』を見ると、「文化財課の 10 年」というページがある。これを見ると、例えばこの 10 年で、５万人もの方々に文化財の普及事業に参加いただいたことがわかる。南アルプスの市民の人口が現在７万３千人程なので、それと比べればその数が決して小さくないことがわかる。

彼ら文化財課の 10 年は、調べ、守り、整え、活かし、伝えるを繰り返す 10 年だったといえる。まず、南アルプス市にはどんな文化財があるのか、あるいは堤防も含めどんな価値があるのか調べる。そして、これを調べるだけではなく守っていく。大事なものは遺そうとする。それを整えて、なおかつ生かしていく。整えるというのは史跡というものを見やすい状態、正しい状態に整備をしていくということだけではなく、わかりにくい文化財のことを整えてわかりやすく正しく伝えるための準備をする、これも大事な仕事である。そしてそれを活かしていく。イベントなどで伝えていく。10 年間これを継続してきた。

※**文化財Ｍなび**　http://103.route11.jp/?ms=2



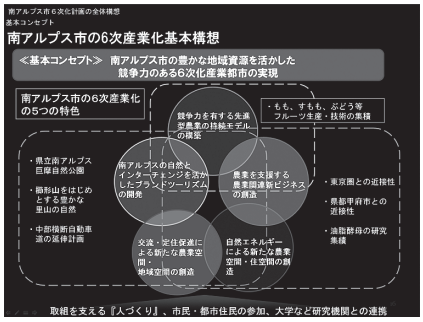




― この先の 10 年、20 年に向けて ―

このサイクルは重要で、今後も継続されるべきだが、次の 10 年においては、やはり新しい挑戦が求められる。それは、市の観光、経済発展、あるいはまちづくり、人づくり。ここに市の歴史や文化財をつなげていくことである。そしてそれを今、市役所だけではなく様々な立場の方と協働で行なうことが求められている。その際に、地域住民あるいは、地元企業なども巻き込んで、文化財あるいは地域の宝をなにか活かせないだろうか、「南アルプス市の特徴」とはなにか、「らしさ」とはなにかを考えるときの基にしていく、これが文化財が持っている特徴を活かしていくということだろう。そこで、以下のようなキャッチフレーズはいかがだろうか。

～昔（れきし）があって未来（ゆめ）がある　住みたい　知りたい　南アルプス～



右は、南アルプス市のホームページに掲載される「南アルプス市ふるさと愛まちづくり」のイメージ図。残念ながらこの中には現在、文化財とか史跡の要素がない。南アルプス市「らしさ」を出すには、ここで文化、歴史環境と地域の価値や物語を織り込んだ「らしさ」、史跡とか文化財あるいは土偶が出てくるようにならなければならないのではないか。同じく市のホームページに載っている市の 6 次産業化基本構想というページ。競争力持続力のある先進型農業、あるいは農業を支援する農業関連ビジネスの創造、自然エネルギー、それから交流、定住促進、南アルプスの自然と交通状況を生かしたブランドツーリズムの開発、これがその特色とされている。このなかにも当然南アルプスは出てくるし櫛形山も出てくる自然も出てくるが、やはり川とか水の歴史には触れられない。「地域らしさ」という視点で考えていくときに、これから先の 10 年なり 5 年の中で、今の取り組みが進めば、「文化財」や「史跡」といった言葉が必ずや出てくるはず。

― 農業振興と文化財 ―

農業振興と文化財とは、おおよそ繋がりそうも無さそうに見られがちであるが、繋がるものである。

姨捨の棚田（長野県千曲市）

コウノトリ育むお米（兵庫県豊岡市）

神子原米（みこはらまい　石川県羽昨市神子原町）・・・など。

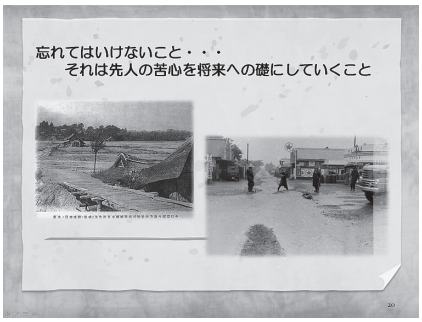
少しの工夫とひらめきで地域が圧倒的な変化を見せる例がある。史跡である将棋頭で作られた米なども一工夫するとブランドに変身する可能性がある。

― 観光活性化と文化財 ―

今の観光は、何か特別なものを見に行くというよりは、ごく当たり前の景色を見に行く、体験をしにいくという傾向がある。昨今は、「非日常的な資源から異日常的な資源へ」などともいわれる。地域住民にとってごくあたりまえの風景、たとえば朝起きて飛び込んでくるただの富士山、景色。これが実は財産、資源になる。その為には、地域の方々が、「よその目から見たという視点」を持ち続けることが大事である。

そしてやはり地域住民がその土地を誇りに思う、端的にいえば「好きになる」、これが地域経済の自立と活性化につながるといえる。例えば山梨県で言えば、ごく当たり前に広がっている勝沼のぶどう畑の景観、これが今観光資源として注目され、人が集まっている。いわゆる「ワインツーリズム」という取り組み。これも多分「よそから目線」といえる。ごく当たり前にあるワイナリーとかぶどう畑を観光資源に変えていった。ただその元には文化財であるとか、その地域の住民の努力がある。そこの連携が観光振興の肝だといえる。南アルプス市にも沢山の資源があるし、ひねり様がいっぱいある。

― 忘れてはいけないこと・・・それは先人の苦心を将来への礎にしていくこと ―



やはり災害の歴史、これを市民が共有し、ちゃんと警戒をし続けながらも、やはりそれを生かしていくことが必要。マイナスと思っていることをプラスに変えていく。そのためにはマイナスを忘れてはいけない。先人の苦心を将来への礎にしていく。それが大事であり、その証拠が史跡でもあるといえる。

― 未来へ ―

将来、子供たちはこの地域を離れていくかもしれない。ただその場合には地域の誇りというものを持って旅立ってほしい。また、ここに残る子供たちも、ここに暮らしたことを誇りに、生まれたことを誇りに思う拠点が必要だ。それが「史跡」であってほしい。その為に強制されるわけではなく子供たちが史跡に集まり、知らず知らずに草をむしるような、そんな史跡を少しずつつでも残していきたい。南アルプス市でも、これからも続けていってほしい。**ふるさとを愛する人々によって魅力ある土地や地域が醸し出されていく。その歩みはゆったりであるが、確実にずっと続いていく。これが文化財を守っていくことと地域をつくっていくこと、振興させていくことの基本理念である。**守ること、それから始まっていくし、調べることもすべてそこに繋がっていく。

田中：森原先生大変ありがとうございました。なかなかわれわれ日常暮らしているふるさとの魅力に気付かないものです。まだまだ我々のまわりには資産があるし、磨けば光るぞ、それからこれから我々の進むべき路にも少しご言及いただいたと思います。森原先生貴重な講演ありがとうございました。

それではここの時計の時間で三時まで休憩をとりたいと思います。皆さん、今回私たち、まじめに話を聞いていただこうと思ってお選びした人選、お二方聞いていただきましたが、このあとは我々のお話ですのでもう本当に気楽に笑いながら聞いていただけるような趣向にしております。この時計で三時になりましたら始めたいと思いますのでお集まりください。しばし休憩といたします。

【第２部　その１】

～　将棋頭、石積出ってなあに？　～

（出演）南アルプス市教育委員会文化財課　田中大輔・斎藤秀樹
（パワーポイント操作・天の声）同文化財課　保阪太一

田中：それでは時間若干過ぎましたので再開をさせていただきたいと思います。次のコーナーは、今お二人の先生にご講演を頂いたのを受けてですね、もう少し深く、そして最新の発掘調査の成果や、地域の伝承なんかを含めて、石積出、将棋頭について知ろう。先ほどのクイズで最後まで残れなかった皆さんもですね、これを聞けば次のシンポジウムの時には景品が手に入るというコンテンツでございます。ところでそもそも将棋頭、石積出って何？っていう疑問にお答えするコーナーです。普通であればこうやって私も偉い先生などと同じようにご講演申し上げたいところなんですが、そんな立場も能力もございませんので、担当二人で掛け合いをしながら面白おかしく・・・　面白おかしくなるかどうかは、分りませんけれども、話していきたいと思います。はじめての試みなのでうまくいきますかどうか、皆様よろしくお願いします。

田中：まぁタイトル、こういうことですね。
斎藤：将棋頭、石積出ってなんなんだっていうところですね。それを簡単にお話していきたいと思います。ではスタート！　田中さんこれは何だと思いますか。
田中：道路ですか。
斎藤：道路じゃないんです。これはですね、今年の夏、散歩に行った時の画像ですけど、御勅使川なんですね。

田中：えっ！！　水流れてないですねぇ、川なのに。
斎藤：そうです。御勅使川って言うのは普通の時には、水がこんなに流れない。干ばつになるとですね、水が流れない川としてですね・・・
田中：じゃあ別に洪水とかないから楽ですよね。
斎藤：と、思うでしょ？
田中：はい。
斎藤：と思いきや、やはり一度台風が来て大雨が降るとこんな姿になるんですね。どうぞ、これは動画になっています。これは堀切という野牛島（やごしま）のところなんですけども、ちょうど水防かなんかのときの映像で、台風４号の時ですかね、私見に行ったとき、本当にここの近くに寄っただけで命が無くなるなっていうくらいの濁流だったんですね。

田中：これじゃあやっぱり武田信玄さん何とかしなきゃって思いますよね？
斎藤：そうですよね。じゃあ先ほど佐藤主任調査官のお話にあったとおり武田信玄の伝承をどうしても話しておかなきゃいけないですね。石積出、将棋頭って言うのは武田信玄さんが造ったのかどうかまだわかっていないんですが、その時代に何らかの形で（堤防）あっただろう、ということは言われているんです。ただ、我々は発掘調査ではなかなかそこまで到達できないんです。御勅使川の土砂を運搬する力が強くてそこまで深く掘りきれないんです。ですから、これからの課題になってるんですけど。
田中：でもあれですね、武田信玄さんが造ったんだかどうだかわかんないんじゃ、そんなに価値はないってことですね。

斎藤:いえ、そうじゃないんです。それをこれからお話していきたいんですが、この写真は米軍が撮った南アルプス市の一番古い航空写真になっています。

田中：はい。

斎藤：じゃあ（パワーポイントの映像を）流してもらいましょうか。今黄色くどんどん塗られてるところ、これが八ヶ岳が噴火して、泥流が流れてきて固まった、いわゆる高い土地ですね。高岩(たかいわ)とか竜岡台地(たつおかだいち)、高岩ってご存知ですか？

田中：あの「小作(こさく)(※)」があるところですよね、今の国道 20 号線沿いの・・・

斎藤：そうですね。20 号ずっと登っていくと・・・

田中：ギャンブル好きの人は「サテライト双葉(※※)」なんて。

斎藤：ああ、ありますね。崖っぷちにこう、「小作」さんが建っているっていうところなんですが、その高岩と竜岡台地が信玄さんのお話でいうと、ちょっとキーポイントになるんですね。では今の御勅使川を流して見ます。今の御勅使川、こんだけの幅なんですね。で、もうちょっと昔の御勅使川を流して見ますと、戦国時代の御勅使川はここに流れていた。このちょうど真ん中あたりを流れていたといわれています。ここもどこだかわかります？

田中：信玄橋から登ってくる県道と重なってますよね。

斎藤：そうですね。皆さん竜王から、信玄橋を渡って旧御影の教習所をずっと通ってくるあの道、あれが御勅使川の前の流路ということで前御勅使川、地元でなまって「まえみでえ」って言われていて・・・

田中：山梨方言ですね。

斎藤：山梨方言ですね。戦国時代から明治時代ぐらいまで流れていた。まあ、江戸時代とか明治時代には本流が今の御勅使川に移って、洪水の時だけ流れていた川なんですけどね。

田中：想像もつかないですね、今は普通の県道ですもんね。

斎藤：そうですよね。で、戦国時代ここがドーッと暴れ川でですね、流されると釜無川と合流して。もともとの釜無川は竜王の方に流れていましたから。

田中：えっえっ！！、甲府の方、直撃されちゃいますねぇ。

斎藤:そうなんですね、それを何とかしようとしたのが信玄さん。あの流路を何とかしよう。そのキーポイントとなったのが高岩なんです。

田中：どうしてですか？

斎藤：考えつきませんか？

田中：ん〜。

斎藤：詰まりましたね、それではみてみましょう。この前御勅使川というところをずーっと流れてしまうと釜無川と合流してそのまま甲府方面にいく流路になってしまうというわけですね。そこで、前御勅使川を北へ向けてしまって目指せ高岩！、高岩の方にぶつけてしまう。

田中：わかりましたぁ！　さっきは高岩はたかいわぁ〜って言わせたかったんでしょ？

斎藤：あまりウケテナイですよ（苦笑）。

保阪【ブザー】：ブブー

斎藤：ブブーって鳴ってますよ。あの高岩の方へぶつけて高岩の目の前で釜無川と合流させれば、高岩が自然の壁になって防げて、それで信玄堤を築けばということなんですが、それをアニメーションでみていきましょう。よし、ここに新しい流路を作ってしまおう！

斎藤：でも邪魔ものがいませんか？

田中：台地！、台地！

斎藤：台地ありますね。それと川の流れって急に作れるものですかね。

田中：いや変えられないですよね。

※**小作**　山梨の郷土料理 " ほうとう " のチェーン店。　※※サ**テライト双葉**　競輪、オートレース、ボートレース、競馬の複合型場外発売施設。

斎藤：変えるには下流に行ってひょいって変われますかね。

田中：いや元から変えなきゃだめよ。

斎藤:そう、元から変えなきゃだめよが出たところで、そのだめよの一番最初のが今日のテーマの石積出なんですね、御勅使川が山から解き放たれたとこに石積出を造って、目指せ高岩、北の方に本流を向けて、次に中流のところで将棋の駒の形をした今日のもうひとつのテーマである将棋頭を築いた。

田中：更に流れが北に向きますね。

斎藤：そうですね。これで流れを二つに分けて・・・あっ、竜岡台地が邪魔してますね。

田中：邪魔してますね。

斎藤：それをですね、信玄さんはこれを切り開いた。ここに水路を作ってしまった。

田中：なるほど。掘切（ほりきり）ってやつですね。別名切通し。

斎藤:で、釜無川と合流するんで、そこにもでっかい岩をたくさん置いて。十六石（じゅうろくいし）という施設ですが、流れを削いで、最後に造られたのが・・・

田中：信玄堤！！

斎藤：そうですね。有名な信玄堤というふうに言われているんです。

田中：じゃ信玄堤というのは力で押さえ込んでいるわけではなくて、流れてきた水を受け流して方向を決めてあげてる堤防ということになりますね。

斎藤：そうですね。でもこのストーリーは信玄さんが生きていた時代から 250 年くらい後の『甲斐国志』っていうものに書かれているわけですね。おそらく信玄堤を築いたのは信玄さん。命じたのは確かなんで。ただ、石積出、将棋頭については、その当時から何らかの堤防はあったと思われるんですが、本当のところはこれからの研究課題、我々あるいは次世代に課せられた課題となっている訳ですね。

田中：じゃあ、これから一つ一つ今日のテーマとなっている石積出と将棋頭について教えてください。

斎藤：知ってるくせに（笑）。まぁいいけど、じゃあお願いします。

保阪【ブザー】：ブブー

田中：はいはい、天の声いいから（笑）。

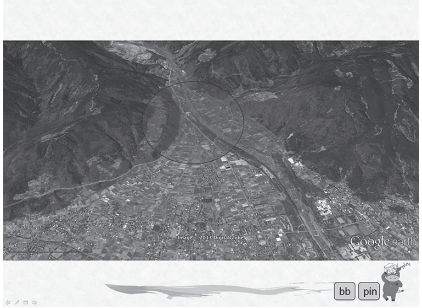
斎藤:まずですね、石積出は先ほどいった山から出てくるところですね。御勅使川が山から解き放たれるところです。これを俯瞰してみましょう。どのあたりに石積出があるかわかりますか？

田中：ちょっとわかりにくいですね。この写真だと。

斎藤：そうですねぇ。じゃあ色をつけてみて、このあたりちょうど山から解き放たれて。今の御勅使川がちょっと映っていますが。

田中：扇状地が始まるところですね。でも扇状地の中で御勅使川ちょっと無理に曲がっていませんか？

斎藤:そうですね。本当だったら自然に行けばこっちに流れてもいいですし、真ん中に流れてもいいですし、歴史的な変遷を考えるといろんなところに流れを変えてきてたんですね。じゃあもうちょっと石積出をクローズアップして見てみましょう。先程も出てきましたが、石積出は一番、二番、三番、四番、五番で守られていて、佐藤主任調査官のお話にあったように多重防御している、こんなふうに守られているんですね。なんで五つも造ったと思います？



田中：それは一つがだめなら、もう一つ、一つがだめなら、もう一つっていう、備えに備えを重ねた考え方ということなんでしょ。

斎藤：そうなんですね。やはり江戸時代とかそういった時代は砂利を積んで石をつんで後は木を使う、そういう自然の素材しかなくて、もう自然にかなわないってことはよくわかっていたんですね。自然を 100 パーセント封じ

込めることはできないってわかっているんで、謙虚な姿勢で、一つがだめだったら二つっていうところで、いろんな備えをしてたってことですね。

田中：なるほど。

斎藤：で、ここには緑も実は活用されていまして、水害防備林っていう松林が今でも見えます。

田中：なるほど、こんな何重にもして守らなきゃいけないって事は、ここがよっぽど大切な場所だったってことでしょうかね。

斎藤:そうですね。下流の村、扇状地の全体の村々を守る、ここは要の堤防。

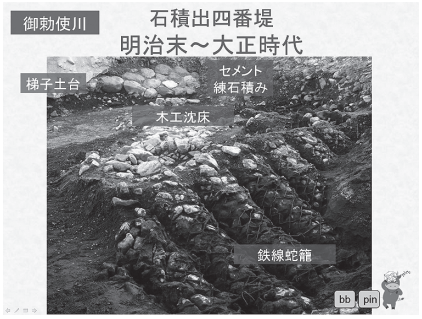
田中：何事も扇の要が重要ということですね。

斎藤：そうですね。で、四番堤の発掘調査の例を先ほど佐藤主任調査官が紹介されていましたけれど、もうちょっと詳しくここでは紹介したいと思います。四番堤の例ですが、発掘調査でわかったのは、まず時代っていつくらいだと思いますか？この石積出って言うのは？

田中：今でしょ！(※)

保阪【ブザー】：ブブブー！！！！

斎藤：あっ、あのちょっと・・・



田中：画面にでてますね。明治、大正時代ですね。

斎藤：クイズにあったとおり戦国時代ってよく言われるんですけど、御勅使川の力はすごいんです。もう流されては造りかえ、流されては造りかえ、で、造りかえられるときには、その時々のいろんな技術が用いられるんですね。

田中：でもこんなに新しいものだったらそんなに価値がないんじゃないですか。だって史跡って昔のものでしょ。

斎藤：そんなことはないんです。それをこれから見ていきたいんですが、ちょっとわかりづらいかもしれないですが、石積出の一番底の部分で蛇籠が使われている部分もありますね。ちょっと角度を変えてみました。それで、発見されたのは、まず松の木で梯子みたいに造って、でっかい石の基礎にしています。

田中：これ、今日会場の外に展示してあったやつですね。

斎藤：そうです。まさに。

田中：みなさん。今日外にこの木が展示してあるから見てください。

斎藤：こんな大きな石を（堤防に）使っているんですが、バラバラに沈まないようにちゃんと胴木といってですね、あそこに据え置くんですね。お城の石垣の技術として導入されたものを河川にも生かした技術なんです。それとともに、その更に前面には木工沈床（もっこうちんしょう）というですね、木枠を組んでここに石を詰める技術があって、根固めになってます。ちょっとこれだとわかりづらい？

石積出四番堤から出土した梯子土台の一部

田中：わかりにくいですね、どういう構造になってるんですか？

斎藤：じゃあ次に行ってみましょう。これはちょっと他のところ。

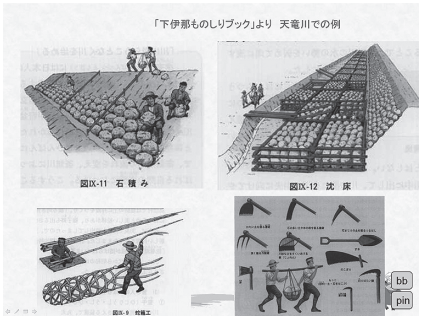
田中：あっこれの方がわかりやすいですね。

斎藤：そうですね。昔は堤防って言うと砂利を積んで一つ一つ石を積んで、ちゃんと石の継ぎ合わせを考えながら積んでいったんですね。こういった技術もあったわけです。それで、これがその木工沈床です。

田中：さっきの写真よりよくわかりますね。木枠を組んで中に石を積めて、堤防の根っこが洗われないようにしているってことですね。

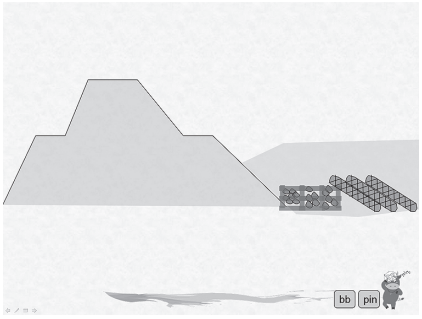
※**今でしょ！**　予備校東進ハイスクールの名物講師、林修（はやしおさむ）氏の言葉。ＣＭで流れた「いつやるか？　今でしょ！」は2013 年に一世を風靡した。

斎藤：まさにその通り。木枠を組むっていうのは、枠といって江戸時代からの伝統的な技術なんです。この木工沈床自体は明治時代に発明された技術って言われていて、つまり近代とその前の近世の技術が融合したような、そういった技術だったわけですね。



田中：わかった！　だから新しいから価値が無いんじゃなくて、昔からの技術が連綿と今まで伝えられてきてる。その事実が価値なんですね。

斎藤：そうですね。その当時、当時の人たちが考えて、その先端の技術を投入していったわけです。で、一番最後の所には蛇籠。今日蛇籠作りを体験された方もいらっしゃると思うんですが、蛇籠を置いている。その構造をちょっと断面で見てみましょうか。はい。これはなんとなくわかりますかね。



田中：これ石積出を横から見たところですね。

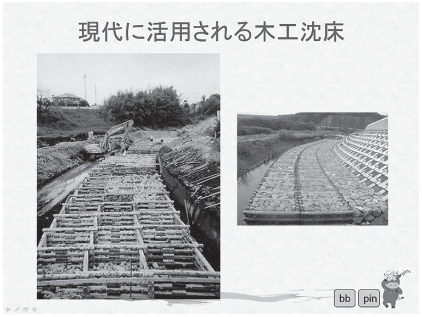
斎藤：そうです。御勅使川が運んでくるのは、水だけじゃなくて泥とか石とかですね。そうすると堤防の・・・

田中：まずやられるのは一番下のところですね。まず水があたるところですもんね。

斎藤：上がどんなにしっかり造られていても、根っこが崩れたらどうしようもない。

田中：人間と一緒ですね。

斎藤：教育でも重要だと思います。



田中：一番重要。

斎藤：重要なところですね。基礎教育っていうのは重要です。では次にいって、ですから昔の人は工夫してここに木工沈床という木枠を組んで中に石を詰める、更に外側に蛇籠をつける。

田中：なるほど二重、三重の備えですね。

斎藤：そうですね、どうしてこんなになっていたと思いますか？

田中：よっぽど御勅使川の流れがすごいということですよね。

斎藤：そうですね。次、お願いします。更にこれはそういう木工沈床が今でも活用されている写真です。

田中：今でも使われるんですね。

斎藤：そうなんです。一応、昭和になって廃れてくるんですが、ただもう一回、今度環境にいいということで、環境、景観にすごいマッチングするってことで・・・

田中：まぁ石と木しか使ってませんからねぇ、基本的に。

斎藤：そうですね。これは見直されている伝統工法で、今いろんなところでまた施工され始めたという技術になっています。じゃあ次。この技術は、発掘されていない三番堤の下にもあることがわかっているんですね。

田中：あっ！そこの三番堤のところ一番下の部分が平らになってましたね。そういえば、見にいったら。

斎藤：そうですねぇ・・・そういえば見に行ったら・・・！？。昨日なんかこの辺で解説してませんでしたか。あの田中さんが。

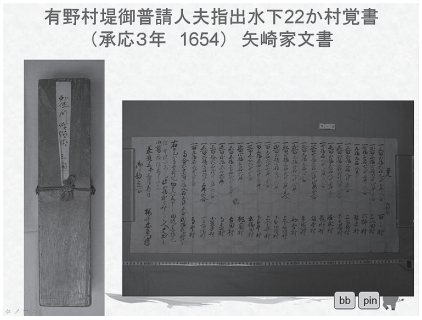
昨日の写真・・・

田中：あっいえ他人です。他人です（汗）

斎藤:そうですか。では次にいってください。ます。古文書が出てきましたね。

田中：何が書いてあるんですかね。

斎藤：なんか目のいい人だったらちょっと。画像が暗くて申し訳ないですけど、吉田とか小笠原とか・・・



田中：村って書いてありますよ。小笠原村とか、あと、なんか数字が・・・金額ですかね。

斎藤：あと箱がありますね。

田中：はいはいはい。

斎藤：これは石積出のある有野地区の矢崎さんってお宅に伝わっている文書なんですが、通常ですと、有野の堤防が壊されたらどこの人が・・・

田中：有野の堤防は有野の人が守るんですよね、原則です。

斎藤:ですよね。それが原則です。普通自分の村だけ行く。ただここの石積出とか有野の堤防は、ここが流されると、さっきクイズでも出ましたが、下流の 21 の村々も自分たちのところも流れてくる可能性があるところだから、この人たちも壊れたらわざわざここを直しに来るわけですね。

田中：有野村を含めた 22 の村ってどの辺の村・・・どの辺の村々なのかちょっと出ますか？

斎藤：図を見ましょうか。これは、航空写真。今の御勅使川、前御勅使川、1000 年前、平安時代のの御勅使川、いろんなところに御勅使川ってのは流れているんです。

田中：これ適当に引いているんですか？この川の跡。

斎藤：いや、ちゃんといろいろな研究成果を元に引いてくるとと、こうなっています。で、今赤く出したのがその 22 の村々になっているんですね。

田中：御勅使川扇状地の村のほぼ全ての村ですね。今、小笠原とか十日市場の人たちが今、御勅使川があふれるぞ。、なんて聞いても、ああそりゃ大変だねぇ〜で済んでしまいますけど、昔はそうじゃなかったって事なのかな？

斎藤：そうですね。この堤防を壊されると、小笠原、十日市場、寺部の人たちを含め、やばいやばい、あそこが切れると俺たちのところまで流れてくるぞ！っていって、有野の人たちは堤防壊れましたよ、来てくださいって言って、動員されてみんなで直しに行くんですね。一つずつ手作業で直されていった。

田中:ああ、じゃぁこの石積出、将棋頭っていうのは、有野地区っていうか白根地区にとって重要な堤防ではなくて、南アルプス市の大部分の地域にとって重要な堤防であったっていうことが、こういう古文書からわかるっていうことでしょうか？

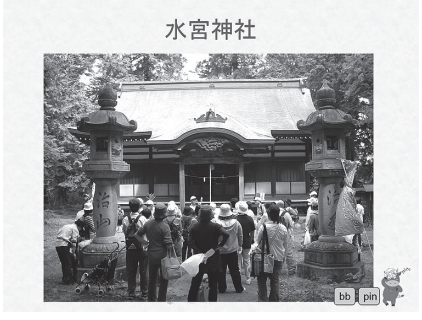
斎藤：そうですね。まさにここがあったから我々がいる、皆さんがいると言えると思います。じゃ次お願いします。

田中：櫛形の人だから関係ないってことはないってことですね。

斎藤：そうですね、関係ないってことはないですね。

田中：あの星なんですか？

斎藤：あの星マークのところはですね、昔の人は技術で守るだけではなく、やっぱり神様、仏様にも守っていただきたいということで、この扇状地に広がる村々の人たちが水防の祈願として「水宮神社（みずみやじんじゃ）」という洪水を防ぐ神様を祀ったわけですね。その場所です。



田中：まさに水に関係ある感じの名前ですね。

斎藤：そうですね。

田中：これ有野の神社ってことでしょ？

斎藤：有野の神社なんですが、ここのお祭りのときには扇状地の村々の人たちがみんな集まってお祭りをしたんです。

田中：これも石積出と同じで扇状地の村々全体を守る神社っていうことなんですね。

斎藤：そうですね。「おみゆきさん(※)」とか甲斐市でありますね、あれの南アルプス市版にあたるんですね。それであそこになんか、読めますかね？

田中：僕、最近古文書とか勉強してるから読めますよ。「治山」。

斎藤：あっちは、あれ読めるんですか？

田中：ちょっと隠れていますけど、「治水」って書いてあります。

斎藤：はい、治水って書いてあるんですね。これはあの非常に新しい灯篭なんですけども、地元の人が寄進して建てたものですが、その思想はやはり治山にあり、治水にあるっていうことが引き継がれてこんな灯篭にも刻まれているっていうことですね。

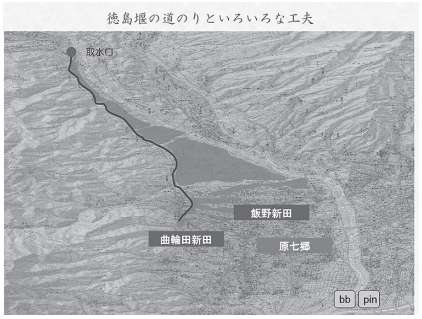
田中：この神社に込められた想いをまさに象徴してる言葉ですね。治山、治水。

斎藤：さあ、それでは石積出を終えてこれから将棋頭に行きたいんですが・・・

田中：史跡ですからね。

斎藤:はい、でもその前にどうしても佐藤主任調査官のお話にあったように徳島堰の話をしていかなければいけない。で、徳島堰の図ですけど、どこだか皆さんなんとなくお分かりですか。釜無川があって、御勅使川があって、その下が南アルプス市、北が韮崎市になりますね。じゃあまずですね、徳島堰の水はどこから・・・

田中：ええっと、御勅使川からでも取れますよね、とりあえず。



斎藤：さっきの一枚目の写真を思い出してください！

田中：あっ、田んぼに水が一番必要なときに御勅使川には水がないってことですね。

斎藤：そうなんですよ。通常、何であんな近くにあるのに御勅使川から水をとらないんだってよく言われるんですが、水がないんです。

田中：川があっても水が取れないなんて、とんでもない川ですね。

斎藤：いや、でもそれが命を支えてきた川の一つではあるんですけど。そこに江戸の商人の徳島兵左衛門（とくしまひょうざえもん）さんっていう人がここの乾燥した土地の開発を思いついて、それで水を取ろうとしたのが韮崎の上流、上円井（かみつぶらい）っていうところ。そこから引いてですね、延長 17 キロメートルくらいです。今コースをもう一回出します。曲輪田（くるわだ）というところまで引いたのが徳島堰、江戸時代の 1670 年くらいに完成した用水路なんですね。

田中：なるほど。

斎藤：この用水路ですが、兵左衛門さん、村の人たちの協力を得て完成したんですが、二度も、その当時完成したとたんに大雨に見舞われて埋ってしまった。

田中：残念でしたね。

斎藤：そしたらですね、兵左衛門さん江戸に帰ってしまったんですね。それはお金がなくなった、あるいはもう一度造り変えてもまた埋まってしまうのではと考えてあきらめたため、とか言われてるんですがもう一つは、なんか想像つきますか。

田中：追い出されちゃったんでしょ？

斎藤：おおっ！よく知ってるじゃないですか。それは。

田中：ちょっと読んだことあります。

斎藤：どんな話だったか覚えていますか。

田中：本当は、徳島堰の水を引いて新しい田んぼが出来ます。その年貢は幕府に上がるんですが、その一部を開発者である徳島兵左衛門がもらえるって約束があったとかなかったとか。その分け前を与えるのが嫌になった幕府が成功しそうだと見るや徳島兵左衛門さんに、はい工事代金は返すからあなたはもう行っていいよって言ったとか言わないとかって、本当だかどうだかわかんないけどそんな話を聞いたことがありますね。

斎藤：そんなことも言われてますね。いずれにしても、その後の徳島堰の事業は甲府藩が引き継ぐんですけど、公が

※**おみゆきさん**　次の「みんなで語ろう　まちづくり劇場」中の蛇籠づくりのエピソードを参照。

引き継ぐんですけども、その地元のリーダーとして選ばれたのが有野の矢崎又右衛門さんっていう人です。この有野の又右衛門さんは自分のポケットマネーまで使って、ローンの借金までして。

田中：よっ又右衛門ってやつですね。

斎藤：そうですね。このローンの借金までしてですね、完成したっていうすごい功労者ではあるんですが、そうやってこんな堰が完成されたわけですね。完成して今色を塗ったのが何だと思いますか。

田中：こう水を分けてきているところですね。これきっと。

斎藤：そうですね。緑色に塗ったのが、堰が出来たおかげで水田が出来たところなんですよ。この地域を一変させた。これを見るとすごいですよね。韮崎市から南アルプス市まで。

田中：こんなに広い田んぼが出来たんですね。

斎藤：そうですね。で、ここまできたんですが、やはり下流ですね、水が届かず・・・

田中：水が尽きちゃったんだ。

斎藤：水が尽きちゃったんですね。それで、その水が届かなかった七つの村が月夜の、あの弱い光でも焼けてしまう・・・

田中：「原七郷（はらしちごう）」！　さっきから出てきますね。

斎藤：原七郷は月夜でも焼けるって言われているような、こんな地域。

田中：大干ばつ地帯が残ってしまったわけですね。

斎藤：そうなんですね。はい。次お願いします。はい、これはもうまとめですね。用水路は兵左衛門さんが江戸時代に造りましたよ、その事業は地元の人が引き継いで矢崎又衛門が完成させました。だいたい 17 キロメートルです。ってこういうような概要です。はい、次お願いします、これは・・・

田中：こんなふうに造ってますよっていう画像ですね。

斎藤：手作業で 17 キロメートル掘っていくっていうのはすごいことですね。次の写真は皆さんの方の中にご記憶ある方、いらっしゃると思うんですけど、こんな・・・

田中：昔は石積みだったんですね。今コンクリートですけどね。

斎藤：そうですね。石だと、例えば今年みたいな干ばつのときに上流から水を引っ張ってくるわけですね、そうすると石積の堰だとこんなふうに・・・

田中：どんどん、漏れるは漏れますよね。石の間からね。

斎藤：そうですね、そこでこれを昭和 30 年代にコンクリート化するって事業があったんですよ。

田中：今の徳島堰、なんか更に延びてますよ、下の方に。水がないって言いながら伸びてますね。

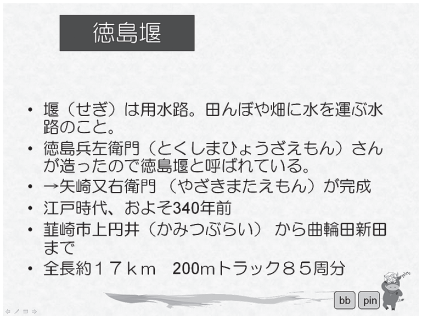
斎藤：そう、でこの地域のすごいところはコンクリート化して漏水を防ぎながら更にこの地域全体、乾燥地帯と言われてるところに全体「畑かん(※)」ってものを造ったことです。

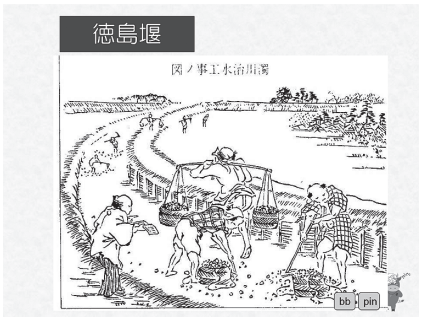
田中：よくなんかシュッシュッシュッシュって、水をまきながら回っているやつですね。

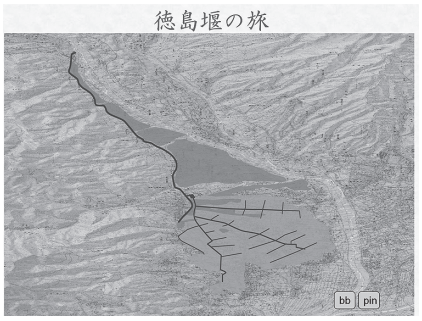
斎藤：スプリンクラーですね、この辺に行くと車にかかったりするんですが。

田中：そうですね。

斎藤：この全域にスプリンクラーが埋まっていて、この色のとこなんですけど、これはものすごい資産なんです。これは徳島堰からの水を引いてるんですね。







※畑かん　釜無川右岸畑地灌漑事業。御勅使川扇状地上の干ばつ地帯、約 1800ha の隅々まで網目のように張り巡らされた配水管とスプリンクラーによる散水施設。原七郷の農業形態を一変させ、南アルプス市の基幹産業である果樹栽培を支える。

田中：徳島堰って歴史な堰でありながら、現在の南アルプスの基幹産業（果樹栽培）を支えているという、とても南アルプス市にとって重要な構築物ということですね。

斎藤：南アルプス市のイメージは、っていうとだいたい「山」か「フルーツ」って言われてるんですが、そのフルーツを支えているのが先人たちが造ったこの徳島堰です。

田中：史跡が、文化財が支えているんですね。

斎藤：そうですね。はい、次お願いします。その仕組みをもうちょっと見てみましょうか。これが石積の堰だとすると模式図にすると・・・

田中：流れてきますよね。

斎藤：流れてきますね、そうするとちょろちょろちょろちょろ。

田中：あああ。

斎藤：流れていって。

田中：下流に来る頃にはどんどん減ってくんですね。

斎藤：そうなんです。下流の、これは後から話も出るか出ないかわかりませんが、実はですね、こんなふうになっちゃうんですね。はい、次お願いします。

田中：コンクリートにすると。

斎藤：水が漏れないのでその分、（下流に運べる）水が増えていく訳ですね。

田中：より多くの水が南アルプス市に届くようになったというわけですね。

斎藤：今は上流に発電所も作られて、一回発電した水をトンネルに通して徳島堰の水として使っている。もう一つ新しい技術も加わっているんですね。

田中：この増えた分がスプリンクラーになってるから、昔から水を使ってきたお百姓さんの権利を侵していないってことですよね。

斎藤：そうなんですよ。

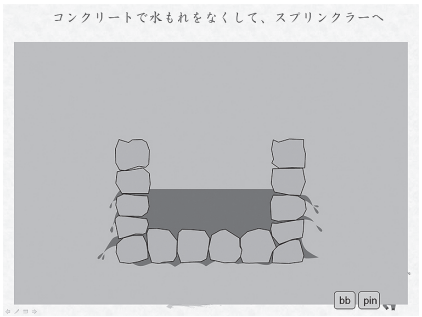
田中：頭がいいですね。

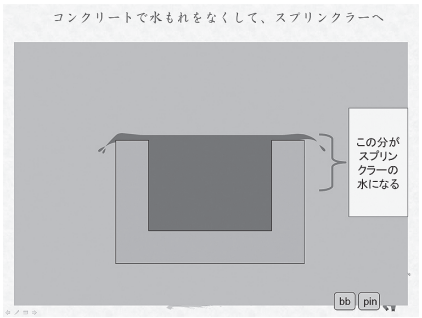
斎藤：次に行きましょう。この徳島堰が作られたとき、一番の難工事はどこだったかというと御勅使川の横断なんです。御勅使川をどうやって横断するか、今色を塗った青い部分は御勅使川の昔の最大の川幅なんです。

田中：あそこ全部が河原だったんですね。

斎藤：徳島堰どんどんどんどん掘ってくわけです。その河原のだだっ広い数百メートルも続いている石の河原を・・・

田中：どうやって横断したんですか。

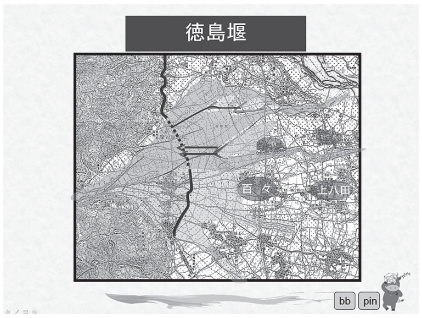




斎藤：その前に、この六科とか野牛島とか他の地域の人たちは、この堰ができたんだったら俺らが村にも水がほしい！っていうことでここ（河原の中）から徳島堰を分水して取水をするんですね。ところで、将棋頭ってこれを見ると、一つじゃなくて上に二つ、ありますね。

田中：あります。韮崎にも史跡があるんですよね。

斎藤：そうですね。かつて三つあったんですが今残念ながら一番上はなくなってしまってるんですが、もう一つ韮崎市にもあるんです。ここにも徳島堰から水を引いていって、今日「将棋頭米」もありましたが、水田が作られていくわけですね。それではここの横断方法、どうするか。最初に兵左衛門さんが作った時にはどんなふうにしたかというと、こんなふうに言われています。こういう木の板を並べてこっちに「牛」っていうのを置いて、溝を掘って通



水するわけです。

田中：今は水が流れてないからいいですけど、上から水が来たらどうするんですか？こんな板関なんか。

斎藤：全部流されちゃいますね、でもまた造るんですよ。

田中：また造る・・・

斎藤：（構造が簡単なので）復旧は楽なんですよ。復旧は楽なんですが・・・

田中：板が流されただけですからね。

斎藤：ですが段々、山が荒れて河床が上がってきたところもあり、徳島堰ができて 2、30 年たつとトンネルにする。木の樋を埋める。

田中：造り直さなくていいですからね。そうすると。

斎藤：そういう技術が出てくるんですね。次お願いします。たとえば、江戸時代って土木技術がすごくて、これは一つの例ですけども東京の街並みのところには木の樋の上水道が完備されてるわけですね。そういった技術が徳島堰にも応用されて（御勅使川を）横断していったんですね。

田中：なるほど。この画像は徳島堰の場合ですか？

斎藤：そうです。江戸時代には木の樋が埋められていました。江戸時代の終わりくらいに石積に変わっていきながら、明治になってくるとこんなふうに今ちょっと外側に見えていますがアーチ型に石を積んでいく訳ですね。これはご記憶がある方いらっしゃると思うので､後でお話を聞きたいと思います。

田中：じゃあ後でお話を聞きます。

斎藤：これだと漏水をしてしまうということで、先ほど言ったようにコンクリート化するわけです。今（映っている画像が）コンクリート化する工事の時なんですが、明治大正に作られた石積を内側からコンクリートをこう「巻きたて」たっていうんですか、覆っている状態。

田中：なるほど。外側にはまだ昔からの石積が残っているんですね。

斎藤:そうですね。残っていながら今コンクリートがある状態、こんな状態なんです。次、お願いします。ここは今、暗渠っていうトンネル、御勅使川をくぐりますよって入口になっています。

田中：ここから先が昔の御勅使川の河川敷っていうことですね。

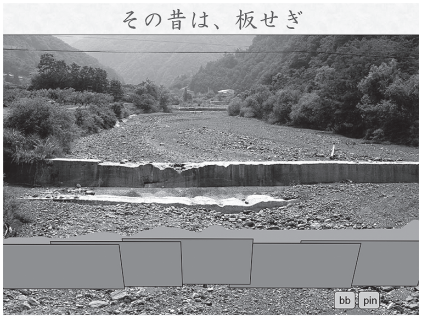
斎藤：そうですね。

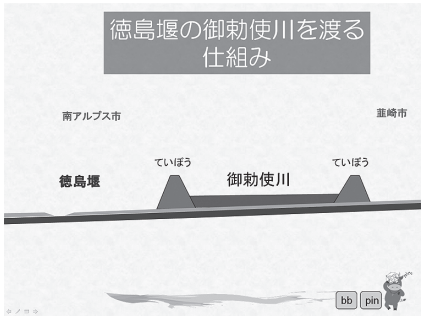
田中：これは今、こうなっているっていう図ですね。

斎藤:そうですね。これは横から見た図で、向こうが韮崎市側上流側、御勅使川の下をずっと通っているわけですね。次お願いします。これはまた川幅が広い画像。ところで一つなにかありますよ。

田中：（広大な河川敷の中に）Ｖ字形の何かがありますよ。

斎藤：先ほど佐藤主任調査官のお話で出たように、あそこがキーポイントになっているんです。じゃあ（映像を）流





してください。ここに徳島堰がずっと続いて暗渠（あんきょ）になっていきます。そうしてあそこでどうしても水の取入れ口をあけたい（そして徳島堰を分水したい。）。

田中：口を開けます。

斎藤：そうすると洪水の時どうなります？

田中：上から水が流れてきたら、せっかく口を開けてもすぐ埋まってしまいますね。

斎藤：そうですね、そこでその重要な取入れ口を守る小さな堤防が地元では残されているんですね。それを写真で見てみましょう。

田中：あっ本当だ、Ｖ字型の堤防が今でもはっきりと残っていますね。

斎藤：はい、次行きましょう。これは実はですね、「桝形堤防」っていうんですが・・・　昔の川幅を出してみましょう。

田中：信じられませんけど、この街並みが全部昔は河原だったんですね。

斎藤：徳島堰をずっと暗渠で通します。一度口を開けて六科の人たちがオラガ村にも水をってことで、水をずっと下流に引き込んでいきます。これが実は「（あとで説明する）将棋頭」に行くんですが、また暗渠になっていきます。これを守る仕組みが桝形堤防です。こんなふうになっているんですね。次いきましょうか。それでこんなふうに水を防いでいる。

田中：なるほど、川の中に造られたこの取水口を守る仕組みですね。まさに治水の部分と利水の部分が一体となった施設ということが言えますね。

斎藤：そうですね。これは（次に話す）将棋頭と一体のものだ！大事だろうということで、教育委員会ではいろいろな方々に協力を得ながら調査を進めてきました。次お願いします。発掘調査したところ見つかったのがこんなふうな木があって、今は空洞になっちゃっていますが、こんなふうになってボルトが使われていて、中に石が詰まっている・・・

田中：これ、どっかで見ましたよ、僕。

斎藤：さっき見ましたね。木工沈床という石積出でも造られていたものです。あの「桝形堤防」自体もおそらく明治時代の終わりくらいに造り変えられた姿といわれています。

田中：じゃああまり古くないんですね。大したことない？

斎藤：そうじゃないんですね。江戸時代から連綿と続いてきたものを最新の技術を使いながらこんなふうに。これは（桝形堤防ではなく）違うところですけど、ちょうど木工沈床を造っているところです。いろいろな人たちが関わりながら、こんなふうに復旧あるいは新しくしていく、整備していく。

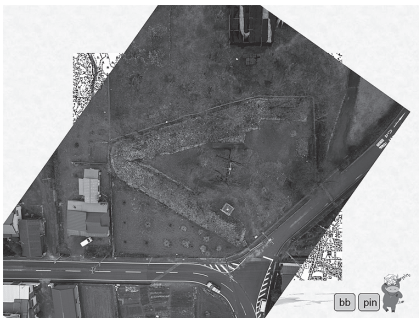
田中：新しい堤防だけれども、人々の思いが年輪のように詰まっているのがこの堤防遺跡ということなんですね。

斎藤：画像を流します。取り入れ口があります。暗渠があって、ずっと行くと六科の将棋頭にいきます。両側には隠れているんですが木工沈床が守っていて、こんなふうに守られているんですね。

田中：今見えているのはほんの一部ということですね。

斎藤：もう将棋頭と桝形堤防はまさに一体！　今度は将棋頭にいきたいと思います。将棋頭を見ていくと、この写真、中の緑色なのは・・・

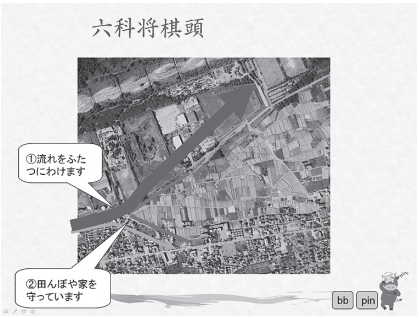
徳島堰2



桝形堤防

桝形堤防

明治45年境川堤防復旧工事



田中：わかりますよ、田んぼですね。

斎藤：そうですね。この田んぼを潤す水は、どこの水かってのはもうわかりますよね。

田中：徳島堰の水ですね。あっすごいですね！　史跡の将棋頭で守られている田んぼっていうのは徳島堰の水を引いているんですね。

斎藤：そうそう、徳島堰の水で作られている。次参りましょう。将棋の駒の形をしているから将棋頭なんですね。

田中：さっきもクイズにありましたね。

斎藤：はい、次お願いします、さっきも出ましたが、将棋頭は信玄さんが流れを二つに分けたんだよっていわれています。これがまだ我々の研究課題なんですけども、実は（将棋頭は）、下流の村々と田んぼを守っているんですね。

田中：もうこの田んぼの色分けをみればすぐわかりますね。将棋頭で囲まれているからこの田んぼが守られているってのは、すぐに想像がつきますね。

斎藤:次お願いします。ヘリコプターで撮った映像なんですけども、色を塗ってみましょうか。

田中：ちょっとわかりづらいですもんね。

斎藤：こっちが御勅使川を守っている堤防一番、二番ってあります。南側も塗ってしまいましょうか。こんなふうにですね。

田中：なるほど。

斎藤：将棋の駒の形ですか。

田中：こう塗っていただくとよくわかりますね。

斎藤：それで洪水が来ると (川の流れを) 分ける。そしてまた用水路を流してもらって、先ほどの桝形堤防から引いた水でこんなきれいな水田風景が広がっている。

田中：先ほども試食をやっていましたけれども、将棋頭で守られた田んぼっていうのはとても価値のある景観ですよね。史跡で守られていて、しかも歴史的な徳島堰の水で潤っているお米。先ほど森原先生のお話にもありましたけど、もしかしたら将棋頭米とかブランド化すると化けるかなぁと思って、今日はそういう思いもあってみなさんに味わっていただきたいと思って試食を用意いたしました。

斎藤：この水利景観、ほんと歴史ですね。数百年将棋頭を守って、徳島堰の水に育まれた景観なんですね。最後まとめてみましょうか。これ、こうやって見るとちょっとわかりづらい。

田中：わかりづらい。

斎藤：うーん。行ってみた時最初どうでした。

田中：あそこに石積が片方しか残ってなくて、その尖っているところがみんな将棋頭の頂点だと思っちゃうんですよね。

斎藤：そうですよね。

田中：史跡として皆さんのまちづくりに使っていただくには、今の状態ではその価値もぱっと見てわからない。これをなんとかしていかなきゃいけないっていうのが今の課題ですね。

斎藤：例えば、本来はこういうふうにずっと続いていたものなんですね。そこに本当は南側もこうあったんだよっていうところも復元してみました。

田中：ウソを復元してはいけないけど、北側は堤がのこっていて、どういう状況かわかってますので同じようなものを（南側にも）復元的に整備して視覚的に見せてあげると、あっ、「将棋頭本当に将棋の形なんだ！」となりますよね。あとはもう視点場ですよね。ちょっと高いところから、今、鳥の視点で見てますからわかりますけど下に立つとよくわからない。そういう工夫が必要になってくるのかな。

斎藤：徳島堰の水が来て水田が出来、そこでは農業がおこなわれている。

田中：その農業が連綿と続けていける環境づくり、景観を守っていくっていうことも当然、この将棋頭 (を守っていくこと) と合わせて求められていくんじゃないかなと思いますね。

斎藤：我々文化財課って、文化財だけが大事なんだろうとよく言われるんですけど、そうではなくて、その周りのもの、例えばここだったら農業の景観と、農業をする人が大事なんですね。そういうことが大事だと考えて常々いろいろな活動を行っています。

田中：以上でございます。お分かりいただけましたでしょうか。

斎藤：初の試みでうまくったかどうかわかりませんが。

田中：ありがとうございます。いろいろ知っていただけたと思います。先ほどお二人の先生に色々なヒントとかご提言をいただいたんですが、今後これを活用して、まちづくりに生かしていかなきゃいけない。その時当然我々だけではできません。色々なお考え、色々な視点を持った方々に今でも協力いただいてこの史跡の保護とか活用がなされています。次のコーナーでは、そういう様々な視点をお聞きして、次の我々のまちづくりのヒントにしていきたいと思います。

題して「みんなで語ろう　まちづくり劇場」というコーナーを続いて始めてみたいと思います。肩の力を抜いてお願いします。

【第２部　その２】

～　みんなで語ろう　まちづくり劇場　～

（出演）史跡にかかわる様々な分野のみなさん
（聞き手）南アルプス市教育委員会文化財課　田中大輔・斎藤秀樹
（パワーポイント操作）保阪太一

―　水をめぐる記憶　―

矢崎静雄さん

斎藤：では、地域の方から始めていきたいと思います。遺跡といえばまずそれを受け継いできた人、守ってきた人たちは地域の人だ。ということで地域の方に何人かご登場していただきたいと思います。地域を代表する方まず、お二人。

田中：地元で徳島堰なんかをよく知っている矢崎静雄さんいらっしゃいますでしょうか。すみません。ありがとうございます。あと、徳島堰、さっき石積の暗渠を知ってるよって手を挙げてくださいました伊藤宏さん。よろしくお願いします。どうぞこちらへお上がりください。ありがとうございます。我々の知らない、我々の子供の頃、その前の頃の徳島堰の話をまずお聞きしたいと思います。

矢崎さん、桝形堤防のところで六科の水をとるって言っていましたけど、そこの取り入れのところのシステムっていうのはどういうふうになっていたんですか。

矢崎：三方コンクリートになる前は石積でして、取り入れ（の穴）も三つあったんです。

田中：はい。

矢崎：大、中、小四角い枠で造った。その大、中、小を一個ふさぐことによって、これは皆さんわかりますか、ちょっと失礼ですが方言がはいりますけども、「ぼっちょをする(※)」って言って、蓋をすること、ぼっちょ、ぼっちょをして調整してるんですね。

田中：なるほど。

三つの穴の塞ぎ方の組み合わせで水量を調整した

矢崎：必要な時は全部開けておく、必要でない時は（大中小の）大をぼっちょする、蓋をする。これは専門の方がいまして水に潜って蓋をしたり、外したり、そういったことで取り入れをしていました。

田中：なるほど、ありがとうございます。今のようにバルブじゃなかったってことですね。

矢崎：そうです。

田中：昔、石積だからあまり水が来なかったってさっき話をしたんですけど、今年みたいな干ばつの年もありますけど、そういう水争いみたいなのはあったんですか？昔は。

矢崎：そうですね、久しぶりに今年は干ばつになりましたけども、私の思い出だと、昭和 34 年の台風七号の時、そのときに（取水口のある）釜無川が崩壊したんですね。そして水がずっと止まった時があった。その時が一番水のあれがあった、悪い言葉で言いますと「**水ゲンカ**」があった、「**水泥棒**」があった。

田中：水泥棒！？

矢崎：私は水ゲンカはしたことがないんですけれども、水泥棒にあったことがある。

※**ぼっちょ**　山梨方言（特に西郡方言）。栓やツマミ、穴をふさぐ道具。鼻血がでたときに、ティッシュペーパーを丸めて鼻の穴をふさぐことを「はなぼっちょをする」などという。

田中：どういうふうにですか？

このトンネルを潜って水泥棒がやって来た

矢崎:それはなんでかっていうと、その三つの水門を寝ずの番で、蚊帳を吊って番をしておった､私が｡その夜水を盗まれた｡どう盗まれかたかっていうと、さっきのトンネルとトンネルの間、こちらの方ですね。下流の方から水が足りないから六科の水門を一つ､｢ぼっちょ｣をかけろということで来たんです。それを番してたのにやられちゃったんです。なぜやられたかというと水ン中を潜ってくるわけですね。そしてその水門からちょうど５～６ｍのとこにその穴がある。そこまではトンネルの中を歩いて来る、で、今度はそこからは水ン中潜って。もちろんもう水が少ないですからそんなにあれですけど。それから穴を一本ふさぐとそれだけ下流に流れる。それを水泥棒っていう。

田中：なるほどね、じゃあこういうことですね。ちょっと見ててみましょうか。

矢崎：はい。

田中：こういう三つ水門があって、これが大きい水門。

矢崎：この話が出ると思いましたので私がこういうものをですね、藁で作って。ほうして専門の方がぼっちょをかったりはずしたり。(※)

田中：あれっ！、下流の方から怪しい人がきました。ちょっと見ててください。こういうことですよね。はい。

～　怪しい水泥棒が舞台に登場　水門に「ぼっちょ」をかっていく　～

あやしい水泥棒が登場！！
水門に“ぼっちょ”をしていく

矢崎：そうです。そうです。そうやって、水を盗んだということです。

田中：そうすると下流に行く水が増えましたね。

矢崎:そうです。こんな話をですね､私も教育委員会から頼まれて何度かやっていたんですけど、犯人が分かったんですよ！。

田中：犯人。犯人ここにいま～す。犯人。犯人。人相悪いですね。

矢崎：どうしてわかったかというとお名前はいただいてはおりますけど、私がこういう話をしておったら遺跡まわり（史跡めぐりツアー）の人たちの中におばあちゃんがいまして、その役をうちのおじいさんがやったって。お名前は控えさせてもらいますけど、これは現実のこん(※※)だったんだなぁ、私もよかったなぁと思ったんです。犯人のおばあちゃんがいたんですよ。

田中：ありがとうございました。興味深い話ですね。ちなみにここに登場していただいた「あやしい水泥棒」は富士河口湖町の教育委員会の人なんですね。手弁当で応援に来てくれました。

斎藤：応援に来てくれました。ボランティアで。

田中：ありがとうございました。

伊藤　宏さん

斎藤：さてそれではもう一人この暗渠についてよくご存じの伊藤宏さんに来ていただいたんですが、まさか伊藤さんは泥棒した方なんですか（笑）？

田中：泥棒した方なんですか（笑い）。水を盗みにいったり。

伊藤：いや、私はまだ子供でしたからわかりません（笑）。私の記憶ですと先ほど徳島堰の絵がありましたね、昭和 30 年代。

田中：ありましたね。

伊藤:ちょうどあの辺（の映像）が私の脳裡に全部あります。ちょうどお家が一軒映ったんですけども私の家のすぐ近くの家。ちょうどあそこのちょっと先から、今の六科の取り入れ口ですね、そこからちょうど私が小学校高学年の頃ちょうど水遊び。今では水泳ですけど昔は水泳なんて言いませんから、水遊びを徳島堰でやったんです。それでちょうど六科の取り入れ口から藁でなくてムギカラ、ムギ

※**ほうして／かったり、はずしたり**　山梨方言。そうして／かけたり、はずしたり。　※※**現実のこん**　山梨方言。げんじつのこと。

のカラ(※)に乗って、中は暗いですからムギのカラの小さいのに火をつけて先に流して、後をいったわけですね。

田中：ここをずーっと浮いて・・・中は真っ暗闇の中なんですよね。

伊藤：今考えるとちょうどこの桝形堤防があるところから、県道に出る手前の豚屋さんがあるところから開けてますから、その間全部ふさがっていますね。あそこもほとんど昔は道路っていう道路がなくて、このくらいの幅の歩くところがあっただけですから、子供の頃そこに行って、そっから潜ってきたと、こういう記憶があります。

斎藤：そうすると桝形からそこまで短いですが、本チャンのですね、御勅使川の下はどうなっていたんですか、数百メートル続いているあっちはどうだったんですか。

伊藤：それは今度中学生になってからですね。

斎藤：冒険だったわけですね。

伊藤：冒険で。ただしこれは水が流れてる時じゃちょっと長いのでわかりませんから、冬場ですね、冬場（通水していない時に対岸の）韮崎市の方に渡って、それから今のところへ潜って（暗渠に入って）。その時には今度は藁って訳にはいかないからボロに火をつけて持って、韮崎側から今のところまで歩いてきます。

斎藤：歩くんですか。じゃあ（当時だから暗渠の中には）石積があったわけですね。

伊藤：記憶にあるのは全部石積で、ちょうど御勅使川の水が流れてるところは上からポタポタポタポタ一年中落ちてます。

斎藤：ポタポタポタポタ来るわけですね、それは冒険ですね。

伊藤：それはかなり（親に）怒られましたけどね（笑）。

斎藤：はい、こういった御勅使川、暗渠の歴史っていうのもとても記憶も重要で、語り継いでいかなきゃいけないなぁって我々、思っています。それでは、ありがとうございました。

― 将棋頭の記憶 ―

清水荘治さん

田中：ありがとうございました。矢崎さんもありがとうございました。それでは子供の頃からこの桝形堤防であるとか将棋頭を見てきた六科地区の区長さん、今の自治会長さんですね。清水荘治さんいらっしゃいますでしょうか。よろしくお願いします。清水さんは当然、六科で子供のころから過ごしていますので、将棋頭とか桝形堤防とか見てきたわけですよね、ずっと。どんなふうに思ってみてきましたか。子供の頃から最近まで。

清水：たいへん恥ずかしい話をしなければならないと思います。私、六科で 70 数年生きているんですけど、昔のあの地理の時間とか歴史の時間とかで武田信玄が将棋頭を作ったよ。あるいは信玄堤を作ったよっていうような話はきいておりました。でも実際に私、ここを見たっていうことは未だかつてなかったということで、私だけかなって思いますけども、いやいろいろな機会にみなさんどうですかって聞くと、いや、「俺も話は聞いているけど見たことはなかったよ」というようなことで本当に恥ずかしい次第でございます。

田中：やはり先ほどの先生方の話にもありますけど、地元で毎日そこにあるとなかなか価値って気付きにくいものですよね。今うち (市役所) の方で、この史跡をこの先どうしていくかっていうことで文化庁のご指導もしていただきながら、史跡の保存と管理の計画を立てています。その地元の代表として委員さんに入っていただいて今回いろんなことを見ていただいているんですが、それを踏まえていかがでしょうか。

※ムギカラ　山梨方言。麦わら。

清水：今度委員の一人に加えさせていただきまして。この２月でしたでしょうかね、実際に見させてもらいまして、ああこんな素晴らしいものを、区民の一員として知らなかったのは大変恥だなぁっていうふうに思っておりまして。素晴らしいこの史跡をこれから保存をしていく、そこらへんを六科区の役員の一人として何かやっていく、やっていけることがあるのかなっていうようなことも考えておりまして。今の徳島堰の取り入れ口で矢崎さんがお話しましたけども、あそこを六科区で今役員、役員っていいますか田んぼ作ってる人が、５月の中旬から９月の中旬まで草刈をして管理はしております。ただこの石積っていうその部分の管理っていうのは我々今までやっておりませんので、これからそこらへんのことはやっていかなきゃいけないかなっていうのを感じております。

田中：ありがとうございました。六科の区長の清水さんでいらっしゃいました。ありがとうございました。清水さんには、この保存管理計画の委員として将棋頭とか桝形堤防の再発見していただいたところ、さっそく私共に区民の皆さんに説明に来るようにというふうに命じてくださいまして、区の公民館で斎藤が行って皆さんにこの史跡を知っていただく機会を得ました。やはりこう我々が 10 年来やってきました**「気付きの促進」**、これからも続けていかなきゃいけないんだなぁということで、地域でまた我々をサポートをしてください。よろしくお願い致します。本日はありがとうございました。

― 再発見への軌跡 ―

谷口一夫さん

斎藤：ありがとうございました。さて、ずっと長年培ってきた治水があって今安全な暮らしができています。だから、ここ二世代くらい（市民のみなさんには）洪水の記憶がないんですね。そうすると自分たちの村を守ってきた堤防っていうのも忘れ去られていく。あの東日本大震災を見てもそうなのかなってところがあります。そこをもう一度きちんとですね、これはすごいものなんだと再発見する契機となった方がいらっしゃいます。白根町時代から文化財保護審議委員をされていて、今では市の文化財保護審議委員でもありますし、山梨県の考古学協会の会長さんでもあられます。谷口一夫先生です。先生ご登壇お願いします。

谷口先生、まずですね、石積出とか将棋頭っていうのはずっと忘れ去られていたというか、あまり取り上げられていなかったんですが、その契機となったのはいつぐらいなのかっていうのをお話しいただければと思います。

谷口：この再発見というのはちょうどＮＨＫの武田信玄をテーマにした大河ドラマ、最初の時のですね。その直前くらい、２年くらい前だったでしたかね、当時の白根町の名執齊一（なとりせいいち）町長さんが、**「歴史も文化もないまちづくりなんてのはあり得ない」**と、とにかく遺跡を探してくれと。だいたいどこでもその頃はいろいろ開発があると遺跡があっちゃ困るんで、あってもなかったことにしてくれっていう時代だったんですが、全く逆で名取町長は遺跡を探せっていうんですね。そして町長と黒塗りの車に乗って旧白根町の隅々まで歩きました。車で行ってこの辺にあるんじゃないかっていって降りてまた探したり。その時にちょっと情報があって。一番堤・・・

斎藤：今映し出されているのは将棋頭ですね。

谷口：これは最初から存在わかってたんですけども、先ほどの石積出の一番堤、二番堤、三番堤、あそこは雑草に覆われていて見ることができなかったんですね。ところが雑草、雑木の間に何か石が積んであるというようなことで、いったいこれは何だろうというところから、これは大変なものかもしれないな、ということになったわけであります。

斎藤：そんなところから石積出が再発見されて、将棋頭の方の発掘調査が行われたんですね、昭和 60 年代くらいですかね。再発見から数十年たって少しずつですがこういった史跡があるんだよっていうことが日本全国に分かってき

て、県内にも分かってきた。ここまで携わっていただいた感想といいますか、そういったものをお聞きしたいんですが。

谷口：その当時はそういう形。そうして白根町の部分にあったのが、町の文化財指定になってきました。先ほどの徳島堰から水を引いてきたところにある史跡将棋頭、そこも町の文化財指定になったわけであります。その後こういうような形でですね、本日に連続するいろんな話の中で、しっかりとした調査が進められてきて、今の姿になってきているわけでありますね。そして、一番堤、二番堤、三番堤と、そして白根の将棋頭と竜岡の将棋頭（韮崎市）を国指定にしろと、そういう段階になり始めて、より精密な調査が必要だということになって参りました。当時の文化庁の服部（英雄）調査官がこれ絶対いけるぞと、そして信玄の時代ってことが確定できなくても、これだけの遺構はもうそれを凌ぐものがあるということで積極的に、こういうふうにしたらどうか、というような指導をいただき、その上に基づいて調査が進められてきた経過がありました。それで、ちょっと余分ですけれども、信玄に結びつく話がぜんぜんないわけではありません。先般の大洪水で京都の嵐山の保津川のところが大氾濫したことがつい先日のことで記憶に新しい所でありますが、かつて保津川の開削をやった角倉了以（すみのくらりょうい）さんという方がいます。その方は富士川の開削もやりました。実はそのお父さんが吉田宗桂（しゅうりょう）さんっていって、策彦周良（さくげんしゅうりょう）という（お坊さんが）中国大陸、明国へ最初（遣明）副使で行って次正使で行ったのですが、その侍従としてついていったのが角倉了以さんのお父さんなんですが、中国の明の時代のいろんな制度を日本に持ち帰ったんですね。それに基づいて保津川とか富士川の開削に携わったと。その策彦周良という高僧は、武田信玄が 35 歳の時に恵林寺に招いて、１年２か月恵林寺に滞在し中国の明のいろんな制度を信玄は直に勉強しているわけです。その後の信玄のいろんな政策にそういうものが役立ってきているというふうに思うんですね。策彦周良の日記ですね、いろいろ克明に記された書物が残っています。おそらくそれを手に入れると、こういう治水にかかわることも書かれているんではないかなというふうに思ったりしています。

昭和62年将棋頭調査

1992年５月30日山梨日日新聞

1999年２月11日山梨日日新聞

斎藤：ありがとうございました。こういった最新の研究は我々もまだわかっていないんですが、外国との研究、中国との関係もちゃんと考えるべきではないかというふうな意見もありますし、そんなところも我々の課題なんじゃないかと。日本だけではなくて海外も含めた視点でいろんなことを考えていかなきゃいけないんですね。

田中：新しい視点をいただきました。本当にありがとうございました。

― 治水研究の新地平 ―

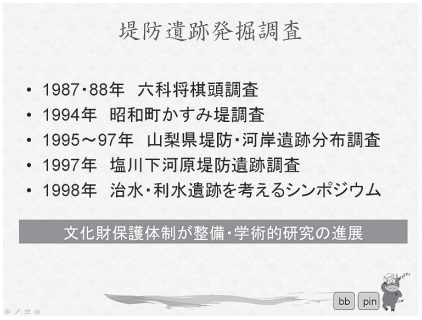
斎藤：ありがとうございました。こういったことが契機となって・・・

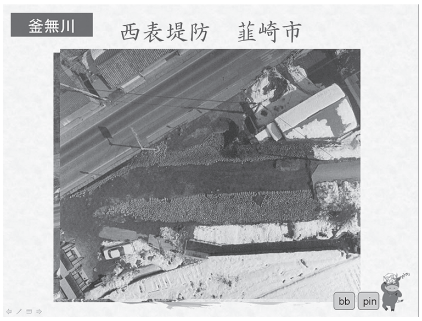
畑　大介さん

田中：こういったことが契機となって。実はですね、山梨県っていうのは堤防を「遺跡」としてとらえて発掘調査が行なわれている。数多く行われているんですね。そういう特異な地域であるかと思います。県内で堤防の遺跡の発掘調査を数多く手がけられている畑大介さん、今日いらっしゃってますので、そのあたりについてちょっと来て教えていただければと思います。

斎藤：全国の治水研究をリードしてきた我々の大先輩ですが、全国的に見て山梨の治水研究はどうなんですか。

畑　：山梨の治水研究の話をするときに一つ大事なことがありまして。それはですね、





今から 15 年前の平成 10 年ですけれど、山梨県教育委員会が堤防の分布調査をしました。堤防ですから当然今の河川区域の中に生きている堤防というのはもちろんあるんですけど、それ以外にも田畑の中、あるいは住宅地の中に取り残されてる堤防っていうのが少なからずあります。山梨県の歴史を考える時に水害ってのはすごく大きなポイントでありますから、その堤防を発掘するってことは非常に大事なことじゃないかっていうふうに当時の山梨県教育委員会の担当者が考えまして、この分布調査をし、それをつぶさに拾い上げて、「堤防遺跡」っていう名前をつけて遺跡にするんです。遺跡っていうのは要するに､開発で壊される場合は一応ちゃんと発掘調査をして調べないといけない､そういう対象にした。ということを県の教育委員会でしまして、これがすごく大きな意味があるわけです。今日は南アルプス市教育委員会がすごいなぁっていう話を全面的にやっておりますけど、山梨県教育委員会もこの件では、ものすごく良い仕事をやってきたなあというふうに思います。県がやったことが、史跡の指定とかその後の調査に対してすごくバックアップになっている。なんでバックアップになってるかといいますと、それによって南アルプスの担当者は結構いっぱい発掘調査をしてますし、隣の韮崎でも私も調査をしましたけど、いっぱい調査をして蓄積があるんですね。ですから史跡の整理、発掘をしてもこういうものが出てきた、こういうものが出てきてもたぶん他の県の人たちにはわかんないけれど、我々は実はこれは大正時代のものだとか、これは江戸時代のものだと結構わかるようになってきているっていうことが一つあります。県レベルで堤防遺跡をやっているのは山梨県だけでありまして、先駆的なことをやっているということです。あと一つ、これは佐藤先生がちょっとおっしゃってましたけど治水技術の上で山梨県っていうのは非常に特徴があって進んだ地域だということです。これは漠然と言われるだけじゃなくてですね、江戸時代の後期では少なくともこういう認識がある。ですから、佐藤先生がおっしゃられたように**山梨県の治水関係の遺跡を調べるってことは全国的な技術の発達､進展っていうものを調べることに繋がる**という点があります。

田中：ありがとうございました。

― 防災の視点 ―

斎藤：こういった研究の蓄積があって史跡になってこのシンポジウムが開かれているわけですが、じゃあ史跡になったからこれはどう活かしていくんだ、先ほどの先生方のお話のポイントにあったと思いますが、もう活かしていただいている例もあるんですね。で、これは使える！ぜひこれは知らなきゃいけない！ってとこで、登場いただくのは社会福祉協議会の小林陽一さんです。なぜ社会福祉協議会かというとですね、私もお付き合いさせてもらって知ったんですけど「防災のプロ」なんです、社会福祉協議会の人たちは。何かあったら市と連携をしてその拠点となっているんですね。その防災のプロの小林さん、今日は来ていただいています。よろしくお願いいたします。

田中：熱い想いを語っていただければと思います。

斎藤：それではですね、まず、なんで社会福祉協議会、縮めて社協といいますけど、なぜ社協と防災がつながって、なおかつこんな将棋頭とか史跡とつながるのかっていうのを、ちょっとお話いただけると思います。

小林：社会福祉協議会の小林です。社協の方では合併以降、住民の声を聴く中で、隣近所のつながりが薄れてるってことがありまして、災害があった時には隣近所で助け合うことができないんじゃないか、っていうことで、災害、防災というものをキーワードに、今、地域づくりを進めているところです。その中で、今まで過去の災害等にも私共行かしていただきまして、特に東日本大震災の時には 10 回ほど被災地の方へ行ったんですけども、ボランティア活動で行ったときに、たまに石碑があったりとか、そこの被災された住民の方が、こういうのが出てきたっていうことで、「この下に家建つべからず」みたいな、過去にここには水害があって津波が来たから、これより下には造っちゃいけないよっていうものもあったんですけども、やはりそれが風化されてしまって、今、海になるべく近く近くに家を建てて生活しやすいような環境の中で生活する中に、また同じような災害で、あのような大きな被害を受けてしまったということです。社協の方でもいろいろ防災事業をやっていく中で、これからの未来を見据えた防災、災害とか防災も大切なんですけども、過去に南アルプス市にどんな災害があったのかなって、まずそこを知ることが大事じゃないかなって改めて感じさせていただきました。それ以降につきましては過去のことを知りながらということで、夏休みボランティアスクールっていうので子供たちとやって、教育委員会の斎藤さんにも来ていただいて南アルプス市には過去どんな災害があったのかということ、あと危機管理室の職員の方に来ていただいて、これから起きる災害ってどんなものだろうかっていうような形で、過去と未来を勉強するような事業に取り組んだりしています。社協の方でも、今後そういった勉強をしながらですね、災害というのは同じ災害は来ないと思います。ただ「同じような」災害は来ると私は思っているので、それを見れば過去もないがしろにしないでしっかりと見つめて、そして未来へ向かっていけるような防災事業をしていきたいなというふうに考えています。

小林陽一さん

斎藤:はい。ありがとうございます。社協さんは、本当に、我々お付き合いすることもあるんですけども、災害があった時もいち早く、予算がなくてもそこへ行くっていうシステムです。いろいろなんかこう作っていただいたり、いろんな活動をされているんですね。**文化財課っていうと文化財だけかと思われがちですが、文化財だけではなく、他の課や、いろいろ他の団体さんと、なるべく繋いで過去のことを未来につなげたい**と思っています。まさにここは一つの例だと思っています。ありがとうございました。

― 技術の最先端は御勅使川から ―

田中：ありがとうございました。今、防災という視点が出てきました。ただ最近我々思うんですけども、このところ災害なんてないじゃんと思うわけですね、市内でそんなに大きな災害はない。じゃあもう人と川とのかかわりという

か歴史というか、治水はもう完成したんじゃないかと思いがちですが、実はその裏でいつも頑張って我々の安全を守るお仕事をしてくださっている方もいます。今日はそのような中で、県の中北建設事務所の方から望月優さんに来ていただきました。望月さんお願いいたします。望月さんには、現在の視点とかそんなことでお話しいただきたいと思います。

望月さんは御勅使川の今の治水事業にも当然関わっておられるかと思いますが、御勅使川の上流には江戸時代以降もこういう堰堤なんかが築かれていますよね、そういうのってどういうことなんでしょうか。

望月：今写真に出ているのが芦安堰堤ですね、旧芦安村の上流に位置しております。この当時は明治 40 年に山梨県内でも未曾有の大水害が発生しております。それまでの砂防と治水をする施設というものは、セメントと土を混ぜて作っている構造のものが多かったです。この芦安堰堤っていうものはこの堰堤時代にコンクリートを日本全国で初めて使用した堰堤になっております。この堰堤を作ることによりまして、日本全国の堰堤がだんだんコンクリート化していく第一歩となっております。

田中:なるほど、全国の最先端技術がまずここで試されたっていうことですね。ということは、その御勅使川の治水っていうのは全国的にも要になるような場所だったということでよろしいでしょうか。

望月：そうですね。当時治水と砂防をやっていく上で第一次治水計画というものを日本の全体で計画を定めております。その中で山梨県では勝沼の方の日川と御勅使川というところが第一次の選定で上がっておりまして、そちらに基づきまして芦安堰堤と今写真で映っております源堰堤、そちらの方の整備をするということが国の方で審議をされております。

望月　優さん

田中：なるほど、山梨で最も早く手を付けなければいけなかった場所ということですね。現在、御勅使川に行くと、落差工っていうんですか、まだ段々になっていますけど、あれはどんな意味があるんでしょう。

望月：こちらの段差につきましては、上流側から出てきます水の流れを緩やかにするために段差をつけることによりまして、下流側の土砂が削られないようにまた土砂が流れださないようにということで段差をつけて、皆様の堤防とかですね、土砂の移動を抑えているということになっております。

田中：今でも毎年のようにこの落差工の補修なんか行われておりますけども、望月さんのお仕事に対する想いといいますか、みなさんに知っていただきたいこと、もしございましたら最後にお願いいたします。

望月：この**南アルプス市というものは県の治水と砂防事業の発祥地**になっております。市之瀬川というところが、県の砂防、治水の第一歩となっておりまして、自分たちが事業を行っていく上でも一番重要な地域であると思っています。また今後御勅使川につきましては、上流域には皆様のお気付きにならないような大規模な山腹崩壊がまだまだたくさんございます。そちらの方を今も順次整備をしていくことによりまして、下流側の皆様の安全を守るように努力しております。これからもよろしくお願いいたします。

田中：ありがとうございました。お忙しい中来ていただきました、ありがとうございました。望月さんでした。

― 技術を受け継ぐ ―

斎藤：今、最先端の我々を守っている技術を教えていただきました。そうすると次に知りたいのは昔からの・・・

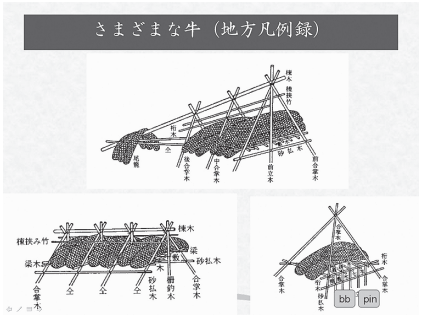
田中：技術ですね。

斎藤：伝統的な技術ということで、今日そこの正面玄関のところで作っていただいた蛇籠作りの職人さんに出てきていただきたいと思います。この蛇籠作り、竹蛇籠というのは昭和 40 年代くらいまではどこでもやられていたんですけどもそれが鉄製に変わってしまいました。鉄製の方が保つからということなんです。ですが、今まさにまた再評価されている。環境にいい、景観にいいということで、しかもローカルな技術でできるっていうふうに言われています。その職人さんが 3 人、全国でも少ないんですけども南アルプス上高砂（かみたかすな）という地区にはまだ3名いらっしゃるんですね。ご登壇いただきます。拍手をもってお迎えください。今日は佐藤先生とか市長さんも汗かきながら体験してただいたんですが、今日体験された方どのくらいいらっしゃいますか。あっ少ないですね。どういうものかもまだ見られたことない方も多いということで・・・　見たいと思いませんか？

左から、斉藤正彦さん、森本昭久さん、清水和一さん

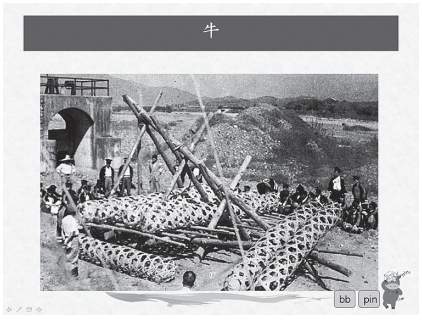
田中：じゃ、やっちゃいましょうか、ここで。

斎藤：やっちゃいましょう！　実際に実演していただくのは上高砂の斉藤正彦さん、森本昭久さん、そしてこちらの方は清水和一（わいち）さんです。こちらの方でお願いします。それではこちらで実演してもらいながらその思い出話もお聞きしたいと思います。ちょっとこちらの準備ができるまでお聞きしましょうか。竹蛇籠って何がいいんですかね、竹蛇籠はどんな利点があるのか、鉄製に比べてどんな点がいいのか。



清水：そうですね、これはすぐ使えるですね（※）。隣の竹を取ってそれを割ってこしらえるとか、そういうような、用意をしておかなくてもすぐ使えるってそういう利点もあるし、なんていうかね、これ、手間があれば（人手さえあれば）みんなで動員して石を入れて作れるというか・・・

斎藤：我々は教わる立場ですので、いつも教えていただいてるんですが、これがいいのは洪水の時すぐに作れる。竹と、鎌と槌ですか、それがあれば。鉄製だと石を詰めたやつをショベルカーかなんかで吊るさなきゃいけない。これはこれと石だけあればいいんですね。



森本：竹蛇籠で一番のメリットは水害の時に緊急時でも使えるってとこ。鉄製だと石を入れることも手間をとる。竹の場合はこの目の倍くらいの石じゃどんどん入っちゃう。

田中：どーんと落とせばどこからでも勝手に入る。

森本：そう、入る。

田中：勝手に網目が広がって。

斎藤：穴よりも大きな。

森本：そうですね。倍くらいの石が入る。

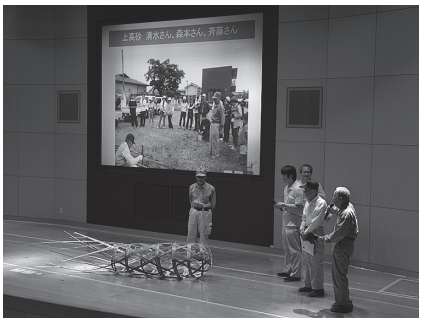
斎藤：入れたら竹はもとに戻るんですね。

森本：そこに竹のいいとこがあるんですね。

田中：じゃぁ実際にちょっと編んでみていただけますでしょうか。職人技です。僕らも教わって頭が混乱して、次どっちだっけなんてふうになってしまうんですけども。こうやって回しながら組んでくんですね。

※助動詞の前の撥音便の消失　山梨方言の特徴。使えるんです→使えるです。行かれるんですか→行かれるですか。等

斎藤：ええ、本当はこれ専用の（作業）台があるんですよね。



舞台上で蛇籠づくりを実演

～ *蛇籠づくりの実演* ～

森本：枠を作ってその上、のっけて作る。竹が足りなくなると順に差し込んでまわしていくだけどね。

斎藤：ずっとどれだけでも長く作れるわけですね。

森本：その場所によって何メートルでも 10 メートルでも作れるからね。普通はだいたい 3 メートル 60 くらいかな。昔の二間っていう。

森本：用水路に使ったわけですね。

斎藤：この蛇籠を作るのに清水さんはどちらの方で作られたんでしょうか。

清水：この二人は上高砂ですが私は（釜無川対岸の）竜王の方から頼まれて、そして主に作っておりました。あの釜無（川）をひかえて信玄堤から南の方へ田んぼが多いから相当な量を作って、毎年毎年用意したものです。

斎藤：これは信玄堤のところに竹蛇籠を置いて釜無川をせき止めて、信玄堤の中に入れて、水を取り入れるためにも作られたということですね。

清水：みなさまご承知のように釜無川の水も毎年同じ場所を流れておるわけじゃないです。去年はこっち、今度はこっちとかそういう、なんていうか、竜王の高岩の今でもあるあの三社（神社）の「おみゆきさん(※)」が来るあそこが水門があって、あそこまで堰の水を持ってくるにいろいろこの蛇籠を使って、堰を掘って、今では重機を使ってするからそんなに苦労ないはないですけど、昔はシャベルであおって、そしてこれを順々に足していってそして水を竜王の方にもってきたようのわけです。(※※)

斎藤：そうですね。治水にも使える。先ほどありましたけど、「牛」っていう水防に使うものの重しにも使えるし、水をせき止めて利水にも使える。じゃあ斉藤正彦さん、作るときどのくらいの大きさのものが多いんですか。

斉藤：昔のあれで、まあ今現在 30 センチくらいの太さのものですね。

斎藤：斉藤さんは静岡の方にも行かれてお仕事されたという事なんですけど。

斉藤：富士川の下流ですね。建設省の護岸工事で、富士川を半分くらい締め切るです。それにその籠が役立って、3月（みつき）くらいはずっと通して仕事してきました。

斎藤：泊まり込みで、釜無川の下流の富士川の治水にも関わってこられたってことですね。こういったのは冬場にやる？　今のは冬場ですよね。

斉藤：秋から冬だよね、ひどい時は稲刈りを途中で帰ってきてまた行くという。

田中：そうすると、その当時も蛇籠作りの職人さんっていうのは貴重だったんですね。

斉藤：そうですね。

斎藤：それでですね、こういった時から緊急な時に皆さんご経験ある人もいるかもしれません。伊勢湾台風の時にも活躍された話を、森本さん。

森本：昭和 34 年の伊勢湾台風かな。そのときに緊急に呼ばれて今の韮崎の舟山橋のたもとでこの蛇籠を作った覚えがあります。それこそこのくらいになるとへえ(※※※)、水の中に石をいれて、あの堤防を守った経験もありました。

斎藤：そうするとあの台風、山梨県にも被害を起こしましたけど、堤防が切れるって時にすぐにこれを作ってそこに石をいれて守ったっていうことなんですね。こういった技術はもう日本全国で途絶えているんですがこの水害に苦しめられてきたこの南アルプス市の上高砂だからこそ、今伝わってきている技術で、我々もこれを伝えていかなきゃいかんだろう、ということでいろいろなことをやっているんですけど、今後もぜひとも我々に伝えていただいて、これを残していきたいと思っています。それじゃあ 3 人の方々、ありがとうございました。

田中：ありがとうございました。

※**おみゆきさん**　信玄堤で毎年４月に行なわれる川除祭礼。甲斐国一宮浅間神社、二宮美和神社（ともに笛吹市）、三宮玉諸神社（甲府市）から信玄堤の北端に勧請された三社神社に神輿が御幸する。御幸祭、大御幸、三社御幸とも。三社神社付近は竜王用水を取り入れる場所でもあった。　※※**ようのわけ**　山梨方言。ようなわけ。　※※※**へえ**　山梨方言。もう。

― ふるさとの景観をずっと　ずっと ―

斎藤：こういった技術もあれば、我々が守り伝えていきたいのは、こういった水に関わる景観、景色も重要だということで、釜無川沿いでですね、あと釜無川だけではなくて御勅使川、前御勅使川に関わってくる地域でこの蛇籠作りの職人さんがいる同じ地域の上高砂で景観づくりでまちづくりをしている清水武秀さん、いらっしゃいますでしょうか。清水さんご登壇お願いします。清水さんは上高砂という地区で、上高砂には堤防がいくつもあるんですが、そこで先人の人たちが水害のために松を植えた、まさに奇跡の一本松と一緒ですが、その松がまだ残されているんですね。そういった松だけでなくいろんなことを含めてまちづくりに生かそうといろいろ活動しているようなんですが、近々、市を交えたいろいろ指定が間近だという、その辺からお聞かせ願いたいですね。

清水：上高砂はですね、数百年前から水害の常習地帯だということでですね、非常に地域が苦しめられてきたわけでありますが、先ほど竹蛇籠のお話があったようにですね、地域の皆さんが水から守ろうという共助の精神とかそういうふうなものがその当時からあったんじゃないかと。治水思想といいますか、そんなようなものが備わっていたんじゃないかということでですね。明治の中頃といいますから、およそ今から 100 年くらい前になりますが、先人たちがこの釜無川右岸堤防にたくさんの松を植えたんですね。その松が「根締め」という効果があるだろうということで、堤防を守ってくれるだろうということで植えたものでありますが、それが 100 年たった今も赤松で 30 本くらい残っております。これも 2 年前に中込市長さんにも堤防を歩いていただいて、松の木を見ていただいたんですが、あそこに住んでる人たちはそういった松を見ても常に接しているから、美しいとかきれいだねとか、そういう表現はなかなか出てこないんですが、この度（この松を）「景観法」という法律に基づく市の「景観重要樹木」に指定をしてもらおうということで、上高砂の自治会が市町村あてに推薦書を提出しております。そんなことで市の方ではこの「景観重要樹木」の指定に向けて取り組んでいるということで、近々指定を受けてくれればいいかなということであります。

清水武秀さん

斎藤：これは実はすごいことで、「景観重要樹木」っていうのは全国にあるんですが、堤防の上の松っていうのは、今、治水の上からいうと倒れると危ないということでそれを指定にするっていうのは非常に難しいんですね。堤防の上にある松が指定になるっていうのは初めてだそうです。そういうふうに聞いてます。

清水：そんなふうなことでですね、**河川に植えられた松が「景観重要樹木」に指定をされるというのは、全国で初めて**の試みだというふうに僕たちも聞いております。

斎藤：はい。それではですね。こういった松、景観が素晴らしいものだということ以外に、いろいろこれを含めたまちづくりをやってる「上高砂まちづくりプロジェクト」という、清水さんがやってらっしゃるその活動について。

清水：それじゃあコマーシャルを入れさせていただきますが、「上高砂まちづくりプロジェクト」で、3 年くらい前からフットパスということで地域の歴史と「甲斐ミント街道」というのがあるんですが、そこを地域の皆さんに見ていただこう、見学していただこうというようなことで上高砂の水に関わる史跡を半日かけて見ていただくということを今進めております。それからもう一つはこの写真にありますように信玄橋から双田橋までの間、約 1.8 キロあるんですが、県道南アルプス甲斐線という県道ですね、その両側に今こ

の花を植えてあるんですが、地域の皆さんの中にどうも県道にこういう花を最初植えたんだけども雑草がはえてきちゃったということで、地域の皆さんで雑草を取って何かうまい花を植えたらどうかということを言う人が出てきまして、ほれじゃあなにがいいかなということでパンジーがいいのか、コスモスがいいのかというようなことをいろいろ研究したところですね、山梨県が開発した「かいミントフジ(※)」というのが、こういった県道とか一般の花壇に植えるのに適していると。5月頃から咲き出して10月くらいまでこの「かいミント」が咲いているということで植えて、ここを通る人達に心の癒しになっもらえればいいかなというふうなことで植えております。

会場を彩る「かいミント」をつかった寄植え

斎藤：とてもこきれいですね、花が咲くと。実はその「かいミント」、ちょっと花はないんですけどそこ（壇上）に活けてあります。そこの花は、ただ活けてある訳じゃなくて、「かいミント」をあしらって作っていただいた、野の花をイメージしたやつなんですけど。清水さんありがとうございました。

― すぐそばにある魅力 ―

田中：ありがとうございました。我々行政で動くことは実は非常に無力なことだと思っています。地域の方が皆さんで考えて皆さんで動いていただいているパワーには、我々のやっている仕事は全くかなわないですね。常々そう思っております。その中で上高砂はとても我々にいろんなことを教えてくれる取り組みをなさっていると思います。今、上高砂に生まれ育った清水さんが上高砂を愛して上高砂の景観を再発見したわけですけども、市内には実は他にももっといろんな景観、難しい言葉で文化的景観なんて言いますね。文化的景観なんて言われてもちょっとイメージわかないんですが、我々。文化的景観にお詳しくて市の景観審議会の委員さんもなさってます、我々の大先輩です。新津健さんいらっしゃってますので、市の魅力であるとか文化的景観のことちょっと教えていただければと思います。

斎藤：こんにちは。

田中：よろしくお願いいたします。

新津　健さん

新津：こんにちは。

田中：文化的景観とか、市にはもっと他にも素敵なものがあるんじゃないかと我々思ってるんですが。

新津：まず文化的景観なんて今すごい難しい言葉が出ましたが、実は今日の講演で佐藤主任調査官もまた森原さんも使ってました。農村景観とか河川景観、ふるさとの景観なんて言ってます。景観なんて言うのは広辞苑で引きますと景色とか風景、美しいもの、美しい景観っていうように言われておりますけど、要するに風景なんですね、少し美しさがあるような風景。でもそれは森原さんが言ったように、なにかふるさとを思い出させるような懐かしい、なんかそういうふうなところもあります。例えばこちらにもあります、水田があって山があるこれが一つの風景なんですね。で、これが最近文化財保護法では文化的景観っていうふうなことで指定設定の基準になっているわけですけども、具体的に言いますと10年ちょっと位前かな、文化庁が日本全国に文化的景観っていう指定、今、35ヶ所くらいあるんですけども、その指定をするにあたって全国でどんなふうな文化的景観と考えられているところがありますかっていうアンケートを取ったんですね。その時山梨から7件ほどあげられまして、その候補がですね、簡単に言いますと田んぼの風景とか畑の風景・・・ちょうど（今映像が）出てます。これは、あのあそこですか。平岡、「平岡の棚田」。棚田なんてのはまさに人が長い間、その自然の中で働きかけてできてきたいわゆる生活の風景なんです。はい、これもそうですね。富士山が遠くに見えますが、こう棚田がある。これもそうですが、そういうふうなもの、いっぱいあげられてきました。例えば具体的にいいますと、森原さんの話の中で出てきた「勝沼のブドウ畑」なんてのもその一つの文化的景観。あるいは芦川村（現在の笛吹市芦川町）へ行きますと、あそこは石垣がいっぱいあります、「芦川村の石垣」とか。この近所も実は候補があげられておりまして、「信玄

※**かいミント**　ハーブ類の一種である「キャットミント」を山梨県総合農業技術センターが改良したオリジナル品種。コマ、ヤツ、フジなどがあり、その中でも「かいミントフジ」は大型で耐倒伏性が強いのが特徴で、街路の植栽などにむく。

堤とその周辺」、もう今日いっぱいお話出ました。まさにああいう優れた景観、あの風景ですね。あるいは徳島堰とそこに広がる水田、あるいは集落が一体となった複合景観としてそれもこれから残したい風景じゃないかっていうふうなことであげられてきております。そういう、文化的景観って難しい言葉なんですが、実はよくよく考えてみるとこんなのまわりにみんなあるんです。皆さんの足元にある。皆さんがこの南アルプスで、山梨県でまわりを見ていて、この風景っていうのが、子供たちや孫たちに伝えていきたいなぁ、残していきたいなぁって思う、まさにそれが文化的な景観なんですね。

田中：なるほど。ありがとうございました。なにか特別なものを想像しがちだけど我々のまわりには、まだまだ文化的景観が知らず知らず、そしてたくさん無限に広がっているということでよろしいでしょうか。

新津：はい。そうですね。

田中：はい。

新津：あと一ついいですか。

田中：はい。

新津：この南アルプスの宣伝をするわけじゃありませんけど、今の文化的景観というのは「文化財保護法」という文化財の立場のお話なんですね。ところが国土交通省の方の立場からいうと先ほども景観樹木って出ましたが、「景観法」というのがあるんです。その「景観法」と「文化財保護法」っていうのは表裏一体、お友達あるいは兄弟みたいなもので、一緒になってここに素晴らしい風景をまちづくりの中で生かして伝えていきたいっていうこと、文化財もまちづくりりも同じなんだっていうところなんですね。それで市の方では、一昨年から「景観 100 選」というひとつの募集をしまして、皆様方の中でも応募された方もいらっしゃると思いますが、そういうふうなものも含めまして足元の歴史や文化や、こういう今まさに御勅使川の様子なんかが、いろんな歴史的な文化財とまわりの水田や集落が一体となった、残していきたい風景かなと思っております。どうぞ、皆様方も足元の風景を見てですね、いろいろまた教えていただければなと思っております。

― 新しい農業 ―

田中：はい。ありがとうございました。大変参考になりました。新津さんでした。ありがとうございました。守っていきたい景観の中で、先ほどから先生方のお話からも出ております、将棋頭と水田の景観。将棋頭で守られた水田景観は特別な景観だと私先ほど申し上げた記憶がございます。ただ実はですね、今年その景観が危機に瀕したんですね。実はその将棋頭で守られている水田をずっと耕作をしてくださった方がおります。我々はそこの方にお願いして秋に稲刈り体験とか、みんなでイベントをやったりしてきたんです。脱穀体験とかやったりしてですね、景観大事なんだって知っていただく、その素材にして毎年そこを利用させていただいていたんですが、今年春先に私、斎藤とそこを歩いていたんですけど、田んぼのそこだけあの田植えがしていないんですよ。

斎藤：植えられていなかったんでびっくりしました。

田中：びっくりしましたね。そして、もう慌ててその方のお宅にいってどうしたんですかとうかがうと、昨年病気をなさって「もう歳だから、もうオラぁできん」っていうふうに言われてしまいました。まさにあの景観が壊れる危機

だったんですね。で、うちも農家じゃないんですけども、斎藤と二人でじゃあ俺たち二人で植えるかって・・・

斎藤：一瞬考えたんですが。

田中：考えたんですが、なかなかそれも難しいということに気が付きまして。誰か助けてくれないか、私たちがいろんな活動をしている中でお知り合いになった方々に助けてくれないかなって、いろんな方にお声をかけたところですね、農業生産法人「青空生産農場」の平野伸次さんが助けてくださいました。ちょっと上がってください。この景観を守ってくださった立役者です。どうぞこちらにお上がりください。で、お願いしたら、「いいよ、私が植えましょう」っていっていただいて、植えていただきました。

どうして私共がお願いしたときこの田んぼを植えていただくことになったんですか。

平野伸次さん

平野：どうも初めまして、「青空生産農場」の平野と申します。すごい前振でものすごく恐縮しているんですけれども、ここで田んぼをさせていただくことができましてとても名誉だなと。いろんな関係者、歴史的な積み重ねがあってこんな素晴らしいところでさせていただくっていうその偶然に驚いております。この上の方に徳島堰の水の取り入れ口の桝形堤防というところがあるんですけれども、その桝形堤防の横でも畑をさせていただき、将棋頭のこの下でも田んぼをさせていただき、こんな恵まれた幸せ者は本当に珍しいと自分でも思うくらいありがたいことだと思っております。これもみなさんの支えがあってやらせていただいてるっていうのを、今日改めて感じてすごく感激しております。

田中：ありがとうございました。平野さん、私共がお願いに行ったときに、**「そういう歴史的な田んぼで田植えをできることをとても名誉に思います」**と言ってくださいました。我々本当に涙が出るほど嬉しかったんですが、今年平野さんのアイディアで、みてください、あの田んぼの中の植えない部分があるのがわかりますでしょうか。みなさん何の形だかお分かりになりますか、ハイそのとおり、「将棋頭」です。本物の将棋頭の上から見ると将棋頭に見える。そんなアイディアも出していただいております。平野さんはこの「フードバンク山梨」という団体の活動にも関わっておられるようなんですが、このお米とフードバンク山梨の関係ってどういう関係があるんですか。

平野：はい、私、生活困窮者に無償に食料を宅配しているＮＰＯ団体に「フードバンク山梨」という所がありまして、そこが直接生活困窮者ないし、ホームレス、そういったところに食料を宅配している日本でも有数のというか、ほぼ唯一の団体で、諸外国ではとても盛んなフードバンク活動なんですが、日本ではまず「フードバンク山梨」が山梨モデルということで日本全体を引っ張っていってるような状況なんです。そのフードバンクさんが新しくフードバンクファームをされるということで、生活困窮者とか、直接路上からホームレスの方が来られたりとか、そういう人たちと一緒に農作業を通じて絆を回復して、いいもの食べてもらって元気になってもらって、また社会復帰していただくっていうことをしてましてですね、で、ここのお米もホントにこれもまた偶然なんですけれども「イセヒカリ」という品種で、伊勢神宮で神田で作られてる献上米になるんですけども、その種籾がまわってきまして、それを農薬と化学肥料を使わない方向でやらしてもらえています。そして、その「イセヒカリの会」っていう方に契約で、今７反、南アルプス全域でやらせていただいてるんですけども、若草（地区）とか有野（地区）とか曲輪田（地区）とか・・・大きくやらせていただいてるんですが、それの約半分を契約栽培させていただいて、残りの半分以上を困窮者とか、どうしても分けてほしいという方には販売して、そういう形でやらせていただこうと思ってます。このお米なんですけれども、あのやっぱりその農業というのは地産池消、その土地で取れたものを土地の人たちに召し上がっていただくっていう、それが身土不二（しんどふじ）っていう、人間はその土からできた生き物なんでそれが一番健康

な姿。特に日本というのは島国なので、外国からはいってくるのは結局全部、海を渡ってこないといけないんですね。そうすると船に乗せてこなくちゃならない。その間にネズミとかいろんな菌とかから守るためにいろんな農薬なりアフターハーベストの殺虫剤とかをすごく使う。もっとやっぱり、これからの子供たちが健全に育っていくためには、いいものを食べて、それでしっかり動いてもらってということで、あの、私ごときが言うような話じゃないので、この辺で・・・

田中：ありがとうございました。私ども力をいただきました。市内で活動を進めていってください。そんなこともあってですね、今回はフードバンク山梨さんのブースをロビーに出していただきました。活動を知っていただけたら、お役に立てればということで出していただきました。平野さん本当にありがとうございました。

― 地域の語り部を育む ―

小野　隆さん

斎藤：ありがとうございました。史跡を守っていくには水田景観も守っていかなければいけないんですけれども、まず地域の歴史を語り継いでいかなきゃいけないんです。我々市の行政がいくら頑張ってもたかが知れていますので、地域の人たちが語っていく、再発見していって伝えていくっていうのが大事なんです。そこで地域の語り部を一緒に養成していく、民間から地域から、養成していこうっていう団体さんがいらっしゃって、それが南アルプスファームフィールドトリップっていうＮＰＯになります。（代表の）小野隆さんどうぞご登壇ください。では、小野さんたちと我々は、「御勅使川ゆかりの史跡を歩く」っていうイベントを、毎年やってるんですけど、史跡を歩く。それずいぶん長い期間一緒にさせていただいて、ただ、そこに協力していく、だけじゃなくて今度は自分たちで語り部をつくろうという取り組みもされているんですね、その辺のお話をお聞かせ願いたいのですが。

小野：南アルプスの観光っていうとサクランボ狩りってのが一番大きな観光資源だったんですが、農家の人たちが実は地元のことをよく知らないで、果物がうまいとか言っていたんですね。で、商工会さんと一緒に完熟フルーツツアーをやってきたんですけれど、**農家自体が地元のことをよく知らないと自分たちの魅力を発信することができない。**そこで何年かかけて仲間たちと一緒に、農家さんそして地元の関心がある人達とこういうツアーガイドの育成事業っていうのをやってきました。そうやって地元のことを学んでいって、そこのことが語れる人が増えてくると、もう観光でさくらんぼ狩りに来た人に対しても、本当に自信をもって南アルプスの果物おいしいんだよってことがわかるんですね。本当に**徳島堰の水がスプリンクラーの水で、「南アルプスの天然水」で自分たちの果物は作られているということが分かったことによって、本当に観光の中で幅が広がったって言ってくれる人がたくさん増えたんです。**地元の人が話すことで、やっぱり押し付けではなくて自分たちの好きなことを話すってことができたんじゃないかと思っています。

斎藤：はい。ありがとうございます。語り部を育んでいただくというのはとても大切な事業なんですね。これがまさに根幹で、我々目指している所でもあるんですが、それ以外に今年は小野さんのところには大変お世話になっているのは、史跡といえば（その管理について）何が大変かいろいろあるんですが、まずは**雑草**なんですね。本当に人の背丈くらいあっという間に伸びるんです。春刈ってもジャングルみたいになってくる。それを何とかしようと、今年はいろいろ知恵を絞って小野さんのところにもお世話になったんですね。

田中：実は、毎年草刈に結構なお金がかかっていて我々の活動を（予算的に）縛っていたんですが、今年小野さんにご提案いただきまして、ある、草刈の達人というか、救世主が・・・

斎藤：現れた。

田中：現れました。

斎藤：現れたんですね。

田中：皆さんお分かりじゃない、知らないですよね。知ってますか。もしかして。

斎藤：じゃあそろそろいいですか。いいですか。

田中：いいですか。出しちゃいますよ。草刈の達人、どうぞ。登場してください。

斎藤：登場してください。どうぞ。

～　全身白タイツのヤギのコスプレ登場　～

会場：(笑)。

田中：どうぞ。あれっ。誰だい君！　狙っていた人とはちょっと違うんですけど。

斎藤:なんか､なんかこう､なんか動きが鋭いというか早いですね｡もうちょっとこう。

田中：君は誰だね？

斎藤：ちょっと、インタビューしてみますね。君は誰ですか？

やぎ：ヤギです。

田中：や、ヤギ！、ヤギがしゃべったぞ！

斎藤：ヤギがしゃべった。じゃあヤギの所属を聞いてみましょうか。ヤギの所属はどこですか。

やぎ：甲府市教育委員会からきました。

斎藤：甲府市教育委員会から、今日はボランティアできていただいているんですね。

本物のヤギさん（上）と
コスプレやぎさん（下　うしろ姿）

田中：ボランティアで来た人に全身タイツを着せてしまいました。申し訳ございませんでした。

斎藤：じゃあヤギさんにインタビューの続き。草はおいしかったですか。

やぎ：おいしかったです。

斎藤：じゃあこの辺で。

田中：後ろではヤギの糞を始末するためにですね、お付きの人もついてくれています。

斎藤：それではこの辺でヤギさんには帰っていただきましょうかね。

やぎ：じゃあどうも。

田中：はい。ありがとうございました。今度本当ですね。

斎藤：今度は大丈夫ですね。

田中：はい、本当に今年、大変助かりました。ヤギさん登場です。

～　本物のヤギさん登場　～

斎藤：どうぞ。あっ来ましたね。ちょっと緊張してるようですね。ちょっと緊張しています。大丈夫ですか。

田中：あっ上がっていただけました、よかった。

斎藤：さて、ずっとヤギを管理している石川遊大さんなんですが。こんなふうに雑草がすごい所をヤギさんに食べて

もらっているんですが、その管理しているＮＰＯ（ファームフィールドトリップ）の石川さんに登場いただきました。史跡の雑草をきれいにするというこのプロジェクトをやっていただいて、その感想をお願いしたいんですが。

石川：はい。ヤギに草を食べてもらうってことなんですけども、それ以外にもなんていうんですか、かわいいんで小学生とか散歩中の人とかが集まってきて、この史跡に対してもう一度興味を持っていただけてるっていうことを感じています。

斎藤：**ヤギは人を呼ぶ**んですね。

石川：はい。

斎藤：まさに先生方の提案のように人は本当に来るんですね。ヤギがいるよっていうと、小学生からどこにヤギがいるんだいって問い合わせがあったりしたんですよね。

左から、石川遊大さんと史跡除草の立役者の一匹、ヤギの“ボス”、小野隆さん、文化財課の斎藤

田中：市役所にですね「今ヤギはどこにいますか？　子供が見たがってるんだけど」っていう電話がかかってくるようになりました。

斎藤：こういうふうに舞台に出ていただいたらインパクトもあるんですけど、本当にすごいんです。我々この前に、前方後円墳である「物見塚古墳」の方で牛で試していただいたんです。で、ある一定の成果があったんですが、牛はちょっと好き嫌いとかがあったりするんです。じゃあ、今年ヤギで実験的にしてみようということでこんな（雑草が繁茂した）状態のところがあります。そこにヤギを入れてみたら、どんどん食べていただいて、（映像）5 月 28 日から始まってヤギさんが食べています。もう一か月くらいたって、こんな（草のない）状態なんですね。ここは刈らないと背丈以上（に草が伸びる場所）なんです。8 月 20 日にはもう食べ尽くして、もうここでは飼えないという状態になってしまったんですね。こういった除草の実効性と更に人を呼ぶ効果。でも実は（裏では）いろんな苦労があって、それをこのＮＰＯさんが引き受けていただいてるんですけども、本当に我々感謝しています。

田中：ありがとうございます。本当に。

斎藤：ここでもう一度ＮＰＯの方々とヤギさんに拍手を。

田中：ヤギの糞の対策で後ろについてくださった先ほどの小野さんの息子さんです。どうぞお面をとってお顔を見せください。せっかくですので。はい。どうもありがとうございました。

斎藤：ありがとうございました。ちなみにこの子（ヤギのあだ名）は、ボスだそうです。

ヤギによる史跡の除草効果にびっくり！

―　まちづくり　人づくり　―

田中：ボス以外は名前がついてないそうですね。さて、だいぶ終わりに近づいてきましたけども、我々が目指すのは実は史跡の保護は通過点でございまして、「まちづくり」です。今日見ていただきましたように、いろんな方々と提携して「まちづくり」（のお手伝い）をさせていただいてるんですね。ところで、南アルプス市で精力的にまちづくり、人づくりをしている団体といえば、我々としてまず思いつくのは南アルプスＪＣ（青年会議所）ですよね。

田中：お忙しい所すみません。南アルプスＪＣの金川健太さんです。後ろ（の映像）を見ていただければわかります

金川健太さん

とおり、ＪＣさんでは毎年グリーンスクールということで、地域の子供たちを集めていろんなキャンプとかをやっています。毎年我々もお手伝いをさせていただいてるんですが、文化財課と一緒に仕事をしてどうですか。ご感想といいますか。

金川：ありがとうございます。南アルプス青年会議所の金川と申します。よろしくお願いします。私どもは「明るい豊かな社会をつくろう」という大きなスローガンのもと活動している団体なんですが、その中でまちづくりを考えた時に、**「まちづくりは人づくり」**だろうということを考えまして、青少年育成事業に取り組んで参りました。青少年育成事業に取り組んでいく中で、先ほどもご紹介ありましたグリーンスクールというキャンプを行っております。これがもう過去９回連続して行われているんですが、地域の子供たちに、しっかりとこの南アルプスの良さっていうのをわかっていただくということを目的としてやっております。良さをわかれわかれと言ってもですねえ、先ほど小野さんが話しましたが、私たち地域に住む人間が良さをあまりわかっていなかったということを、そこで痛感したわけです。その中で地域の良さを知っている人達は誰なんだろうというところを探っていくと文化財課さんのこの３人に巡り会えたという流れがありました。本当に地域に対して熱い思いを持った方たちに一生懸命協力いただきながら、子供たちに、この地域って本当に素晴らしいんだよ、何気なく見ているところ、何気なく見ている景色、何気なくやっていること、本当にこれ素晴らしい事なんだよってことを９年間かけてちょっとずつですが伝えられてきたような気がします。今年のキャンプの写真ですね、（重要文化財）安藤家住宅(※)に実は宿泊を・・・　これ言っちゃっていいんですか。

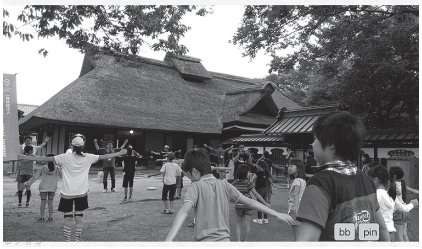
グリーンスクール

田中：大丈夫です。私どもで管理している重要文化財なんですが、特別に（夜間も）開放して子供たちに泊まってもらいました。

安藤家住宅に泊まり　初めての蚊帳

金川：なかなかこういう経験ってできなくてですね。この経験が自分たちの地元を知る、地元に誇りを持つっていうことに繋がっていくんじゃないかっていうふうに思っております。子供たちは今後社会に出て、この地を離れる時が来るかも知れないですが、そんな時にも俺の地元、私の地元はこんなに素晴らしいんだっていうような自信を持って周りの人たちに話せるような南アルプスの子供たちになってもらいたいなというふうに思っておりますし、この誇りを持った地域にまた帰ってきて我々と一緒にまちづくり、次の世代に続けていくっていう活動を一緒にやってもらえたらいいなぁっていうふうに思っております。ちょうど私たちが皆様方先輩と子供たちの繋ぎ役、中間点におりますので、やっぱり誰かがやらなくてはいけないと思っております。それを縁あって集まった地域に暮らす青年経済人として責任をもって活動をしていこうと思っております。ありがとうございます。

文化財で人が育まれています



田中：ありがとうございました。いつもＪＣさんのパワーに圧倒されながら・・・

ともに！

あれ、誰がこんな画像用意したんだ（驚）・・・、これＪＣさんの方の何周年記念ですかね、（理事長が）手塚さんの時ですね。我々がＪＣさんに貢献したという形で表彰をいただいたんですが、ただお互い様でございまして、やっぱり影響しあって我々まちづくりの一角を担って参りたいと思います。金川さん本当にありがとうございました。

※**重要文化財安藤家住宅**　宝永５年（1708）に建築された豪農の旧宅。主屋を含む敷地全体が重要文化財に指定されている。現在南アルプス市が所有・管理し、地域文化発信の拠点のひとつとして、一般に公開している。

― 未来へ ―

白根飯野小学校から駆けつけてくださったみなさん。左から、飯野理奈さん、名取はるかさん、伊藤颯太さん、石原夕華さん、時田和彦先生。

斎藤：本当にこのシンポジウム長時間お疲れだと思いますが、最後にこのシンポジウムを締めくくるのは、これからこの南アルプス市をつくっていく子供たちに登場してもらいたいと思います。南アルプス市内の全校ですね、この史跡、将棋頭、石積出、徳島堰を勉強します。だいたい現地にいって、4年生の授業でやるわけです。どの学校の生徒さんも素晴らしいんですが、今回は地元であり発掘体験もした、ということで白根飯野小学校（の子どもたち）に来ていただいたんですが、実は昨日、雨が降って運動会が今日になってしまったんです。運動会が終わってすぐ駆けつけてもらいました！　じゃあ飯野小学校の皆さんどうぞ。4名の方に代表で来ていただきました。

田中：先生もありがとうございます。親御さんにも本当にご負担だったと思います。本当にありがとうございます。ただ先ほど金川さんの話もありましたけど、やはり未来づくりは人づくりでございますので、未来を担う子供たちの感想とか率直な想いを聞いて会を閉じたいんですね。どうぞ、こちらの真ん中に並んでくれるかな。どうぞどうぞ。まず先生からですね。

斎藤：4年生でこの将棋頭、石積出を勉強するわけですが、こういったことを題材として勉強するっていうのはどんな狙いというのか、ありますでしょうか。

先生：白根飯野小学校はちょうど将棋頭ですとか石積出に守られた場所にあります。ですので子供たちはその上に今の自分たちや自分の生活があるっていうことを、まずわかってほしかったです。それから多くの方が知られているのは信玄堤っていうのがあるかと思うんですけども、それを聞くとどうやらこういうものがあの郷土の武将である武田信玄さんのおかげ、武田信玄さんがやってくれたものだってとらえがちなんですけども、そうではなくて、名もなき多くの先人たちの知恵や工夫や努力によってこういうものがあるっていうことを子供たちに教えたいというふうに考えました。

斎藤：ありがとうございます。それではこういった事を子供たちが実際勉強してどんなふうに変わっていったかを。

先生：ただ単に現地に行っただけだとなんか石がいっぱいあるなあ、なんか大きいなあっていう形で終わってしまうかと思うんです。それで見学の前、それから見学の時、それと見学の後というふうに3回、斎藤さんには学校に来ていただいて勉強しました。それから発掘体験（じつは清掃体験）もぎりぎり間に合ってやらせていただくことができました。それから後ほど写真も出るかと思いますけども、石積出の上に手をつないで全員並ばせました。これです。この時はなんか楽しいイベントでちょっと終わった感じだったんですけども、学校に戻ってからもう一度手をつながせました。そうすると子供たちはこんな大きいんだっていうことを実感としてとらえたんですね。こういう大きなものを名もなき多くの先人たちが工夫や努力を重ねてやってくださった、そういうことに子供たちは多くの感銘を受けていました。

斎藤：ありがとうございます。紹介が遅れてしまったんですが、時田和彦先生です。アイディアマンでして、今の手をつなぐのも、我々が手をつないでくださいって言ったんじゃなくて、大きさを知るんだったら、これみんなで手をつないでみようよと、こう提案してくださったんですね。そしたら素晴らしいこの写真が撮れたということなんです。それでは子供たちの方から感

想を聞いていきたいと思います。飯野理奈さんから聞いてみたいなあ。はい、お願いします。

飯野：石積出や将棋頭をつくるときは機械とか無かったけど、知恵を絞ってつくったことがすごいと思いました。

斎藤：じゃあ、名取はるかさん。

名取：大きな石積出を協力して人がつくっていてびっくりしました。

斎藤：はい、伊藤颯太さん。

伊藤：あんなに大きな石積出を一つつくるのにも大変なのに、地域を守るために二つや三つ、四つ、五つとたくさん堤防を作っていて、先人たちはすごいなと思いました。

斎藤：これは多重防御の話をしてますね。すごいですね。はい、最後に石原夕華さん。

石原：昔の人は、洪水などを防ぐためにいろいろな工夫や考えを出してつくっていることがすごいと思いました。

「この石積出があって今の私たちがいるんだ」と思いました。

斎藤:はい、素晴らしいですね。石積出がなかったら我々がいなかったかもしれないという、そこまで思ってくれた。ところで、これはみなさん、「仕込んだ」と思われるかもしれないが違うんです。これは本当に。

田中：これ、本当に違うんです。

斎藤：これは感想文を我々にいただいて、本当にこういう感想を書いてくれていたんで、じゃあそのまま話してくださいとお願いしただけなんですね。我々の方がエネルギーをもらった、そんな形になっています。じゃあもう一度ここで飯野小学校の皆さんに拍手をお願いいたします。

田中：ありがとうございました。

斎藤：ありがとうございました。ちょっとこのままでいてください。

田中:それではですね、いろんな方に語って頂きました。今回お話をいただいた方、恐縮ですがもう一回檀上に上がっていただけますでしょうか。

斎藤：矢崎さんからすいません。皆さん今日ご出演していただいた方、小林さんも含めて畑さん新津さんもお願いします。

斎藤：どうぞ清水さん、ゆっくり、大丈夫でしたらぜひとも壇上に上がっていただいて。

田中：どうぞ上がってください。

斎藤：ここの正面を開けていただいて両サイドにちょっと分かれていただけますか。そしたら先生もあちらに。矢崎さんこちらの方へ。お願いします。

田中：はい。このように文化財といいながら様々な、一見文化財とは全く関係ないようなところの方々とつながりを持たせていただきながら、私たち地域づくりに貢献して参りたいと思っております。最後にこの南アルプス市のまちづくりのイメージを皆さんで共有できるようなビデオを作成いたしました。最後にそれを見てこの会を閉じたいと思います。皆様もちょっと檀の上から見ていただけますでしょうか。

～　イメージビデオ「道標（みちしるべ）」の上映　～

イメージ映像「道標（みちしるべ）」から抜粋

～ 閉 会 ～

田中：はい。ありがとうございました。すいません、電気をつけてください。この曲、「道標（みちしるべ）」という歌です。この史跡の活用というのが未来への「みちしるべ」になるように、今日のこのシンポジウムを開催させていただきました。市長、最後まで聞いていただいて総括というか感想お願いします。

壇上の出演者にむかって、総括を述べる市長

市長：私は最後まで居させていただきまして、本当に聞かせてもらいました。皆さんからパワーをいただいて皆さんとともに、この南アルプス市を過去からの道しるべを得て、素晴らしい未来のまちをつくりたいなと今、感動しているところであります。さきほど飯野小学校の時田先生が言われましたけども、みんなでつくっていきたい。武田信玄がつくったわけではないんだろうと思っております。名もなき人達、私たち一人ひとりがそうですけれども、この南アルプス市をつくるには過去を勉強して、そしていろいろ今まで不幸であった人、そして、幸せであった人いろいろあると思いますが、その中から我々は不幸の無い、安心で安全なそんな未来のまちをつくっていきたい。それをつくっていくのが我々、市民の皆様そして今日檀上におられる皆様方が中心となって、行政も皆様の活動を一生懸命支えながら、皆さんが主役でやっていけば南アルプスは素晴らしいまちができる。そして、その流れを飯野小学校のこの子供たちが受け継いでくれたら、必ずや南アルプスは素晴らしいまちになるだろうと思っております。私は自然と人とが共生できる、そして文明が調和できる、そんなまちを日本の全国の市町村に先駆けてモデルを作ってみたい。そして南アルプスに学べというような南アルプスをつくってみたいなあと、このように思っております。そのためには、まず**今日のシンポジウムのこれを市の職員全員に見てもらおうと今、決意をした**ところであります。そして七万三千人の市民全員がこれをみて、そして同じ方向、同じベクトルで七万三千人が向かっていけば、我々の理想とする過去からの未来への道しるべが近い将来できるかなあとこのように思っております。本当に今日は感動をして、市長も主催者であるわけですけども本当に文化財課の皆さん苦労して。今日は佐藤先生も東京からおいでいただいて、

そして県からもご指導いただく中で素晴らしいシンポジウムであったと思っております。このシンポジウムで終わることにしては市長として私はいけないと思っておりまして、これを実現に向けて本当にこれから頑張っていきたいなという感想を持ちました。本当にありがとうございました。

田中：ありがとうございました。それではご登壇いただきました皆様、本当に我々のワガママを聞いていただきましてご出演していただきました。最後にもう一度、拍手をいただければと思います。それでは、お席の方へとお戻りください。ありがとうございました。本当にご苦労様でした。以上でシンポジウムを終わりますが、最後に閉会の言葉として南アルプス教育委員長より閉会の辞を申し上げます。ご登壇ください。では渡邊教育委員長、お願いいたします。

教育委員長　渡邊次朗

渡邊教育委員長：今回の開会にあたり、文化庁より佐藤調査官、そして山梨県より森原さん、本当にありがとうございました。今後ともぜひ御指導のほどよろしくお願いします。そして何より多くの皆さんにお集まりいただきこのように盛大なシンポジウムができました。もう本当に皆さんお話の通りです。**「史跡というのはモノではなく人だ！」**ということを皆さんも私も改めてこの機会に知ることができました。この歴史、史跡もすごいわけですけれども、今回の企画をした、すみません、私たちのことになりますけど、文化財課のスタッフのみなさんがこれだけのシンポジウム、そしてこの 10 年間、本当に日々日々毎週、学校又はさまざまな活動をしながら地域の方達に文化財のすばらしさ、それを育んだ人々のすばらしさを伝え続けていただいたということに感謝をこの場で申し上げさせていただきたい。そして、今日お集まりの皆さん、もちろん私も含めて、これから様々なそれぞれの形で、農業であったり経済活動、観光かもしれない。お孫さんとちょっと散歩に行く、将棋頭にちょっと行ってみようか、秋のこの季節。そんなことでも構わない、一つひとつ、そういった活動をみんなが積み重ねること、そしてその輪をこれから広げていくことを皆さんとぜひお約束をさせていただき、今回のこの国指定の 10 年を記念しましたシンポジウムを閉会とさせていただきたいと思います。本日は長時間にわたりどうもありがとうございました。

田中：ありがとうございました、以上で全てとなります。本日は本当にありがとうございました。気を付けてお帰りください。今日出演していただいた飯野小学校の子供たちにはささやかなプレゼントといいますかお土産がありますので帰りにこちらにお寄りください。

CREGIT（敬称略）

講　演

佐藤正知　文化庁文化財部　記念物課　主任文化財調査官
森原明廣　山梨県教育庁学術文化財課　副主幹文化財主事

スタッフ

全体総括　庁内調整　来賓担当　**有泉　久**　文化財課長
総括補佐　来賓対応　駐車場担当　契約事務総括　**石川珠美**　文化財課　課長補佐
総合司会　出演　パワーポイント作成　**田中大輔**　文化財課
出演　イメージ映像作成　パワーポイント作成　**斎藤秀樹**　文化財課
影の出演　イベントブース総括　ＰＣ操作　映像・音響・照明総括　パワーポイント作成　**保阪太一**　文化財課
会場・舞台担当　ケータリング担当　来賓対応　**市川千草**　文化財課

写真撮影　映像記録　**望月秀和**　山梨県考古学協会　（公財）山梨文化財研究所（ボランティアとして参加）
キャスト　あやしい水泥棒　**杉本悠樹**　山梨県考古学協会　富士河口湖町教育委員会（ボランティアとして参加）
キャスト　コスプレやぎさん　**鷹野義朗**　山梨県考古学協会　甲府市教育委員会（ボランティアとして参加）

伝承館ブース担当　受付担当　**深澤　茜**　ふるさと文化伝承館スタッフ
伝承館ブース担当　会場設営　会場整理　**一瀬　等**　ふるさと文化伝承館スタッフ
竹蛇籠体験ブース担当　会場設営　会場整理　**清水　脩**　ふるさと文化伝承館スタッフ
会場誘導　**中込清香**　ふるさと文化伝承館スタッフ
ヤギと遊ぼうブース担当　映像・音響・照明補助　**加藤由利子**　文化財課サポートスタッフ
会場整理担当　展示パネル作成　タイムキーパー　**小林素子**　文化財課サポートスタッフ
会場整理担当　展示パネル作成　タイムキーパー　**桜井理恵**　文化財課サポートスタッフ
将棋頭米ブース担当　展示パネル作成　会場整理　**塩澤宏紀**　文化財課サポートスタッフ
展示パネル作成　イベント準備　**高畑美和**　文化財課サポートスタッフ
将棋頭米ブース担当　展示パネル作成　受付担当　**山路宏美**　文化財課サポートスタッフ

出　演

源民謡愛好会のみなさん
矢崎静雄
伊藤　宏（前有野地区区長）
清水荘治（六科地区区長）
谷口一夫（南アルプス市文化財保護審議会委員長　山梨県考古学協会会長）
畑　大介（公益財団法人　山梨文化財研究所）
小林陽一（南アルプス市社会福祉協議会）
望月　優（山梨県中北建設事務所）
斉藤正彦・清水和一・森本昭久
清水武秀（上高砂まちづくりプロジェクト）
新津　健（南アルプス市文化財保護審議会委員）
平野伸次（農業生産法人　青空生産農場）
小野　隆・石川遊大・やぎ（ＮＰＯ法人　南アルプスファームフィールドトリップ）
金川健太（一般社団法人　南アルプス青年会議所）
時田和彦（白根飯野小学校教諭）
飯野理奈・名取はるか・伊藤颯太・石原夕華（白根飯野小学校児童）

後援・ブース出展

青空生産農場　南アルプス青年会議所　上高砂まちづくりプロジェクト　NPO 南アルプスファームフィールドトリップ　NPO フードバンク山梨　国土交通省関東地方整備局富士川砂防事務所　南アルプス市子どもの村小中学校　山梨県中北建設事務所　山梨県考古学協会　山友会

制　作
南アルプス市教育委員会文化財課

てつすげえじゃんけ将棋頭・石積出！

御勅使川旧堤防（将棋頭・石積出）国指定10周年記念シンポジウム

— 記 録 集 —

西暦２０１４年3月２５日　発行

編集・発行　　南アルプス市教育委員会文化財課

〒４００－０４９２　山梨県南アルプス市鮎沢１２１２
ＴＥＬ　０５５－２８２－７２６９

印　　刷　　●●印刷株式会社

〒０００－０００○　●●県●●市●●○○○○
ＴＥＬ　０００－０００－○○○○

てっ すげえじゃんけ将棋頭・石積出！

御勅使川旧堤防（将棋頭・石積出）国指定10周年記念シンポジウム

―記録集―

二〇一四

南アルプス市教育委員会